

綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

東都名所圖

三

松濤軒長秋翰
長若川雪且圖畫

閏

都名所圖會始出遠在余成童

時一閱之即謂此可以供卧游

矣則江戸亦不可無是輯也後

數歲聞諸西山大久保翁有齋

藤幸雄者有採勝之癖方撰江

戶名所圖會採擇稍遍描寫頗

盡然獨病江戶稱名所者僅僅
不足俚指也余謂凡名所之稱
本出於咏歌者流蓋其設法謹
嚴畫一縱今有山秀水麗足以
吟咏而其不為古歌所取者不
得稱之名所是其所以雖世有

汗隆要不失為雅馴也然名者
賓也實者主也主豈可以賓加
損焉哉矧秋里氏之撰非惟所
謂名所而已神祠佛寺說係恠
誕紫陌綺街事涉猥瑣者亦網
羅而不遺乎矧復江戶之為地

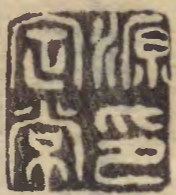
武野之曠。秩額之峻。濯沔之永。
玉川之澄。絡繹邦域。霞閣思出。
之宜春。真土菴崎之宜。焯衿帶。
郊坳。其勝殆不讓上國乎。是亦
何病之有。翁領而是之。既而幸
雄沒。翁亦尋逝。終不知其成否。

然而秋里氏所著拾遺與味河
泉攝及一二諸州名所圖會者。
陸續上梓。盛行於世。余於是乎。
悵然恨幸雄之輯愆。期失時而
又聞其男幸孝善。追其志。再搜
三索。蒐聚滋廣。猶未公於世。幸

孝亦以父化戊寅沒又遺托之
男幸成牽成泣愛之黽勉不怠
校讐極力竟竣其功間者幸成
突然抵門通刺出其全帙示之
且需序言是蓋由余注日介人
促其成也余乃一閱三歎追念

與西山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄牽孝與西山翁皆
不觀其完成矣然其所以歷年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
舉則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畚會之

撰固供卧游。尔以充童觀。非所以專示大方。若夫覽者。尤其不雅馴。則可謂不知類矣。余更為作者分疏其由。云天保三年閏月。冠山松平定常撰。



與西山書云。河三矣。書言。

和嘉平刻序之四

海內地名。著於古人和歌者。宗祇澄月之徒。攬而輯之。稱之為山川之險易。風俗之淵遠。名物之同異。可坐而識也。吾江戶名所。顯於古人和歌。而晦於當今者。不少矣。多麼川調布。著於延喜式。霞関載於武藏風土記。堀並井。彙於紀貫

之僧西行之歌。皆名所之顯於古
而今失其蹤者也。及考古之士過
而訪之。林壑再啓其闕焉。泉石
每炫其奇焉。然無勝情者。則不
能也。齊藤幸雄有勝情矣。有
勝具矣。江戸勝區名從。素於榛
叢。三墟之官。而不可識者。搜經

谷。披窮林。或訪之。古老。或徵之。
新碑。又自史傳地誌。諸家名所。
和歌。紀行之書。以及釋說野乘。
苟有足以資考鏡者。必博採
總括。闡發於澠。論不可問之蹟。
為其名所。則著之繪事。收山河
於尺幅。駭萬象於筆端。亦可

以當卧遊矣。於是百年。湮晦之
迹。區英雄百歲之故。愛在士列。如
之芳躅。榮然。而復炫其奇。乃。所
謂物。不能自見。待人以章。者。驗
是。未及。成。書。遂。疾。而逝。識者
惜之。嗣子。幸。孝。克。續。先。緒。補。之
未。備。余。先。人。與。幸。孝。締。交。七。久。

矣。嘗。約。為。之。序。而。子。孝。享。年。不。永。
亦。繼。而。捐。館。嗟。夫。幸。存。胡。為。所。稟
於。性。者。厚。而。所。享。於。年。者。獨。為。殊。
不。獲。痛。惋。也。及。七。子。成。結。承。遺。誠
以。一。人。而。任。二。世。之。編。纂。卷。帙。為。繁。
採。掇。亦。博。而。補。稍。悉。審。契。勩。必
當。始。克。成。斯。浩。瀚。之。編。可。謂。幸。脩。

有人述者無憾矣。乃走尔微序於
余。可云尔先人易簣。盖八稔矣。而余
以薄技浪代先人之任。大方之消
固所不免也。天保癸巳春三月

江户 龜田長梓 謹識

牧野信之 圖

Handwritten text in a cursive style, likely a continuation of the letter or a separate note. The text is written vertically from right to left across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The characters are dark and clearly legible against the aged paper background.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The characters are dark and clearly legible against the aged paper background.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper and is organized into a single column. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of certain historical writing systems.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper and is organized into a single column. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of certain historical writing systems.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written vertically on the right page of the open book. It appears to be a formal or official communication, possibly related to the military or administrative matters mentioned in the adjacent page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written vertically on the left page of the open book. It appears to be a formal or official communication, possibly related to the military or administrative matters mentioned in the adjacent page.

神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四

神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四
神皇正統記 卷之四

花 〇〇〇〇〇〇〇〇
 瑞 〇〇〇〇〇〇〇〇
 大 〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 心 〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

なまおのち揚れし此の如く
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに

たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに
たのむるにあらざるに

多ふくまのあはれをいふ
 ちかひのあはれをいふ
 のうたをいふ
 申すかまゆつこまよし
 心も松河新長秋志る候

凡例

凡此編の次序ハ 大城と以て首と一餘ハ南方小回環す
 近北斗七星の位小配當て都て七卷と以て全終す
 凡江戸の地ハ度々盛衰して名流言士の芳躰ハ蔚然と
 して史冊と照曜し琳宮梵刹ハ林の如く聯なりて悉く
 卷々小邊を一故よその中にも由致河を撰て録す或は傳記
 亡ひて證と志るなり其土人の口碑小存するもの取て證
 考一或ハ吾根の浮説や々言妖妄小涉るものハ悉く省く
 然りと雖人は不賒矣と傳稱の久しなり其ハ今漢も不添刪
 評鑑を加ふ小枝を一一と姑く其後と載て大伽藍と雖も
 東歷事實と亡失して詳ふまゝ車輪を且小祠支院の類
 新建築のり其ハ悉くあれと闕きて汝古博物の士小務ひ
 此日後輯の成る小及ひて附載せんと欲するもの

凡方位と示す小糸位と指して其の東西南北を在りと標し
又左右と示す小糸位と指して其の東西南北を在りと標し
又左右と示す小糸位と指して其の東西南北を在りと標し

凡引用の書全文と載せしめてその綱要のまゝと撮るまゝと
摘するもの紙頁増多し人々を覽るるに厭倦の念を生せん紙
張り多し故に次小神社佛刹小傳り所の佛像宝塔書畫
諸什蓋の類神祇附會小傳りて其質決す人々を覽るるに厭
倦の念を生せん故に次小神社佛刹小傳り所の佛像宝塔書畫
寺僧の言ひ傳り所小任せしめて又武藏風土記の殘編ハ
備書ありと雖古來より世々傳へるる書ありしが姑く是を
用ひてその取捨ありて人々を覽るる人の意を生ずるもの
凡神社佛閣の幅員方域と圖すべし其の古今形勢と
撰寫は且地志の間小田時遊觀の形勢と繪る其態度
風俗服飾容儀も亦古今の形容と寫し舊地小基て画す

りのハ各時と分り是地之の風光と潤色して他邦の人として
東都盛大の繁榮ありて知らるる且童蒙は觀覽小倦りて
かゝるるありんが為なり

凡此地名所の中武藏野隅田川二布とて第一の勝槩と以故
隅田川と云ふ小分ちて六七の二卷小記せり西岸小芙蓉は白峰
雲間小峰へ東岸小荒波の翠鬟晚霞小蘆して山水の風致備り
縦觀の美は地小傳り依りて西岸の全勢と眸中小收んと欲せ
は支卷と對照して其全局と知るべし

凡真間の舊跡ハ下総の地小して武藏小分ちてすとも總て亦
利根川と隔つるものなり其葉集以降は芳蹟あり且
文人墨客吟詠と負ひて遊邸と曳くり其必風光と賞と
第一の壯觀と以て不於て豫念志の例小倣ひて併せ記し
は此れ内小收む覺るるは亦其と諒せし

附言

此書ハ祖父ノ寛政中ニ編マシテ父縣麻呂ノ刑補文化ノ末少シク
ナリト文政ノ今少シテ上梓ノ功ト終リぬ凡年序ト経ルニ千有余年
江都蕃昌ト随テ神社寺院境地沿革ナリノ頗多ク一向ノ小祠モ
須臾ト壯業スル大社ト多シ德ノ神菴ト巍然スル莊嚴セザレズ
之ノ少クハ或ハ祝融ノ災ト罹リテ樓門回廊ト燒失シ礎石ノミ
存スルノ類無廢枚舉ナクハ然リトモ時々是ト改メテ修スル
有リ今時ノ新ニ差スリノ多ク見テ今ノ如クニシテ

齋藤月岑藏

江戸名所圖會卷之一

天樞之部目錄

- 武藏國號基 日本武尊孫父岩倉心小武器と收り上圖
- 江戸始元 大江戸東南の市街より内海と望の景
- 元且諸彦登城景 松原小浜 梅林坂 橋留 道三橋 日本橋 同魚市
- 八代曾河岸 龍の江 平田町 浦上 神田 守定地
- 砂籠橋 常盤橋 一石橋 八橋一覽圖
- 天王河旅所 小大橋町 通町 大橋町 三井 呉橋店 本町 藥種店
- 浮世小路 十軒店 同雜市 本石町 時の鐘 堀留 同陸河岸 子代田橋 同河
- 福田村舊址 白藤橋 同河 今川橋 下込 神田明神舊地 子代田村舊地
- 本銀町土手 荒洲 飯田町 世継橋 同河 神田明神舊地 小川町 基立 神田
- 護持院舊地 飯田町 世継橋 同河 飯田町 中板 新茶の水
- 田安基

水道橋 神田区

昌平橋 神田区

藍深川 神田区

柳橋 神田区

歌舞妓芝居 神田区

新大橋 神田区

塊塚 神田区

天満 神田区

作難太神宮 神田区

新川太神宮 神田区

東比須前橋神社 神田区

三ッ橋 神田区

新川酒問屋圖 神田区

湊橋神社 神田区

細島同白魚細 神田区

暖敷耆姬 神田区

水提町舞妓芝居 神田区

汐留橋 神田区

尾張町兵衛屋 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

西本願寺 神田区

江風山月樓 神田区

糸女系 糸女井 神田区

新橋 神田区

三縁山増上寺 神田区

極樂橋 神田区

日比谷稻荷河 神田区

赤福寺 神田区

金地院 神田区

駿河臺 神田区

神田川 神田区

辯慶橋 神田区

清水如水宅地 神田区

吉東町旧地 神田区

江戸橋 神田区

天王寺旅所 神田区

永代橋 神田区

靈巖島 神田区

換炮洲 神田区

丹後殿前 神田区

柳原封疆 神田区

沙草橋 神田区

杉森稻荷社 神田区

加茂三淵稻荷居地 神田区

日田市 神田区

瀧の渡 神田区

茅場町藥師堂 神田区

佃東先生居宅地 神田区

隨見屋浦 神田区

藥師堂稻荷神社 神田区

半井上養翁居宅地 神田区

任吉明神社 神田区

寒橋 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

尾張町兵衛屋 神田区

汐留橋 神田区

暖敷耆姬 神田区

細島同白魚細 神田区

筋違橋 神田区

丹後殿前 神田区

柳原封疆 神田区

沙草橋 神田区

杉森稻荷社 神田区

加茂三淵稻荷居地 神田区

日田市 神田区

瀧の渡 神田区

茅場町藥師堂 神田区

佃東先生居宅地 神田区

隨見屋浦 神田区

藥師堂稻荷神社 神田区

半井上養翁居宅地 神田区

澄島 神田区

西本願寺 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

尾張町兵衛屋 神田区

汐留橋 神田区

暖敷耆姬 神田区

細島同白魚細 神田区

任吉明神社 神田区

寒橋 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

尾張町兵衛屋 神田区

汐留橋 神田区

暖敷耆姬 神田区

細島同白魚細 神田区

任吉明神社 神田区

寒橋 神田区

筋違橋 神田区

丹後殿前 神田区

柳原封疆 神田区

沙草橋 神田区

杉森稻荷社 神田区

加茂三淵稻荷居地 神田区

日田市 神田区

瀧の渡 神田区

茅場町藥師堂 神田区

佃東先生居宅地 神田区

隨見屋浦 神田区

藥師堂稻荷神社 神田区

半井上養翁居宅地 神田区

澄島 神田区

西本願寺 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

尾張町兵衛屋 神田区

汐留橋 神田区

暖敷耆姬 神田区

細島同白魚細 神田区

任吉明神社 神田区

寒橋 神田区

織田有樂齋第宅地 神田区

尾張町兵衛屋 神田区

汐留橋 神田区

暖敷耆姬 神田区

細島同白魚細 神田区

任吉明神社 神田区

寒橋 神田区

三田三田 春日明神春日明神社
 功運寺功運寺
 飛塚飛塚
 伊四子薬師堂伊四子薬師堂
 高輪高輪 泉岳寺泉岳寺
 福翁洞福翁洞 常光寺常光寺
 高輪高輪 東禅寺東禅寺
 高輪高輪 八幡宮八幡宮
 網坂網坂 月波楼月波楼
 濟海寺濟海寺
 祖来先生墓祖来先生墓
 網坂網坂 湯水湯水
 三田八幡宮三田八幡宮
 竹葉寺竹葉寺 舊址同古事
 魚籃觀音堂魚籃觀音堂 御見坂御見坂
 高輪高輪 大木戸大木戸 七月廿六日
 如來寺如來寺 太子堂太子堂 唐申堂唐申堂
 寶藏寺寶藏寺 子安子安 經社經社
 谷山谷山

武藏

武藏 東海道小屬也 和名類聚抄曰 牟佐之國府多磨郡不在と云く
 武藏國上古八東山道の内八光仁天皇の宝龜二年辛亥冬十月己卯
 大政官奏一と東海道小屬也 續日本紀不云
 橘樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗 比企 横見 埼玉 大里 男衾
 藩羅 榛澤 那珂 兒玉 賀美 秩父 葛飾 等以上二十二郡あり
 那珂等の三郡を加へ葛飾を除て廿四郡とす 詳るは貞享三年丙寅三月利根川の
 西と割く武藏國小屬也 昔本所葛西の巡淺草の川と國界として川より東の地
 一圓小下総國ありと右云々 今葛飾郡の半を割く利根川の以西と武藏の國此
 葛飾郡といふ東と下総の國の葛飾郡といふ和名抄武藏國管二十一とあり 葛飾郡
 今是を加へ二十二郡とす 和名抄葛飾と加止志かと訓を同書小多磨と波と加し
 古事記牟那志小作 舊吏記胸刺小作 萬葉集小牟 同くむとと稱せ
 其義ハ風土記抄小武藏の國秩父の嵩ハその勢ハ勇者の怒り立ち
 や日本武尊此山小東夷征伐の祈願をこめあひこの後東夷盡く平治
 せしその武器を秩父岩倉山小納めふりこの國とむと稱せしと
 なり 稱徳天皇の神護景雲二年武藏の國より白雉を獻し 公
 卿の奏せし言小哉武藏の字を以嘉名とす 嘉名とす
 續日本紀稱徳紀云神護景雲二年六月癸巳云武藏國橘樹郡入飛鳥部言志五百國於



日本武尊東夷征伐
 の時武具以秩父
 岩倉山に收りて
 是武藏國号の
 濫觴なり
 倭健戎容猛
 征西又伐東
 腰間十束劔
 草薙偃威風
 春齋子

同國久良郡獲白雉獻焉即下郡鄉議之奏云雉者斯良臣一心忠貞之應
白色乃聖朝重光照臨之符國号武藏既呈載武崇文祥一とあるハと云
半邪志の三字を好字に改め二字は定め武藏と書て志の文字を畧る
一とあり此白雉の瑞みつと武藏の二字を祝と奏する詞より今の名なきとあり
東照宮様當國は大成を志め鴻業の基を闢さるひより
四海竟に干戈の勞を忘れ万民長に太平の化を浴せしむる乃是
天意のあらむむる所中々國の瑞も自ら昇平の御代に應じたるあり
家集 物名むと一

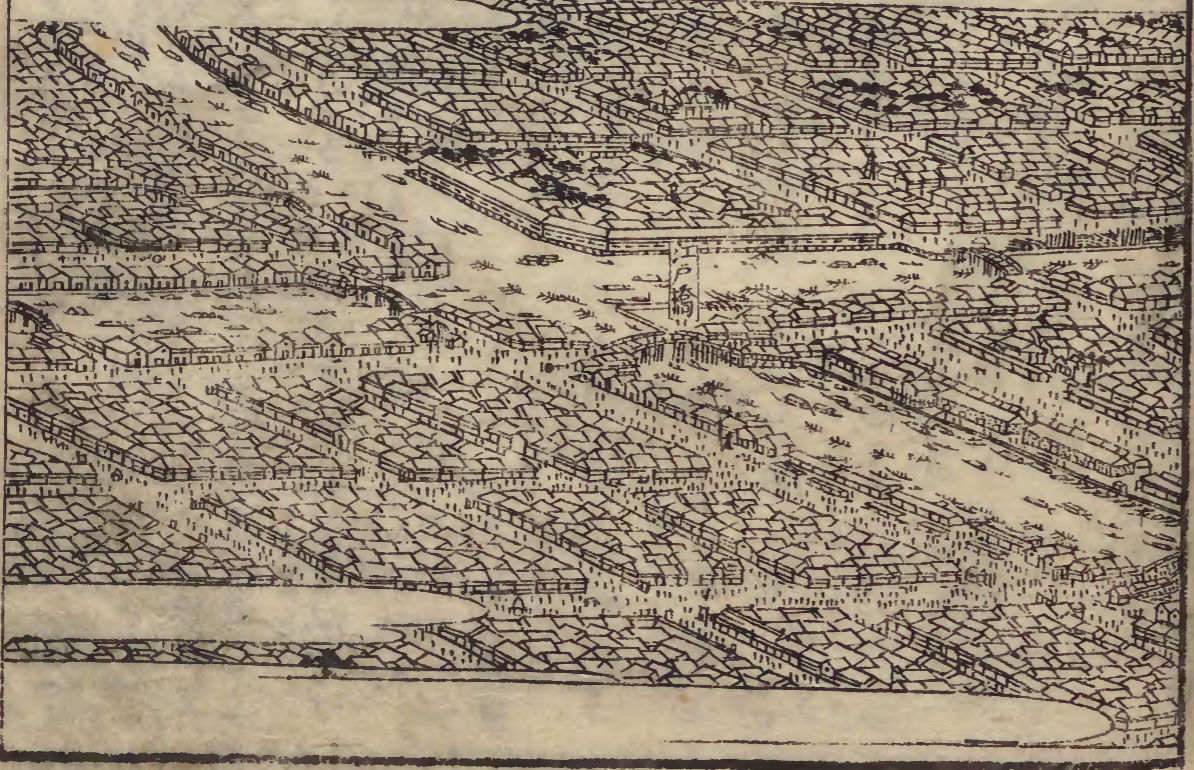
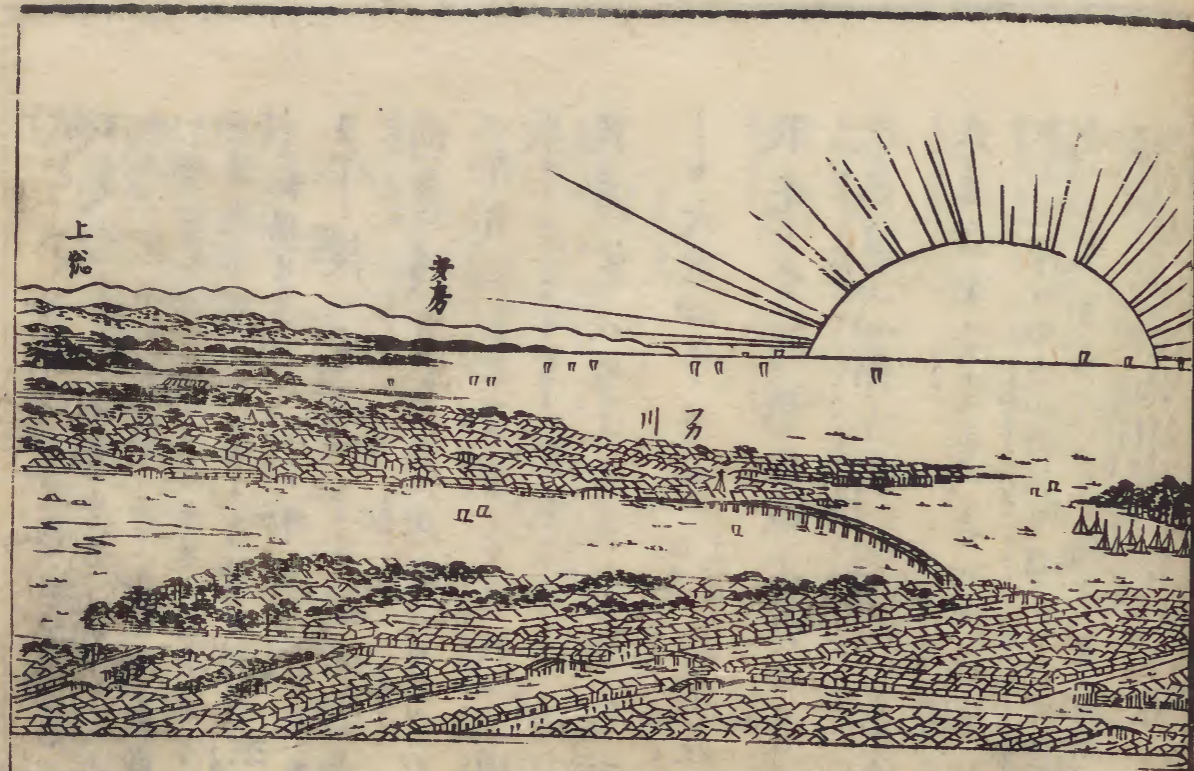
おぼせしとくはよわりの遠くわらわりの 材本人丸

江戸 豊嶋郡峽田領と其封境往古ハ廣くわらわらに似たり

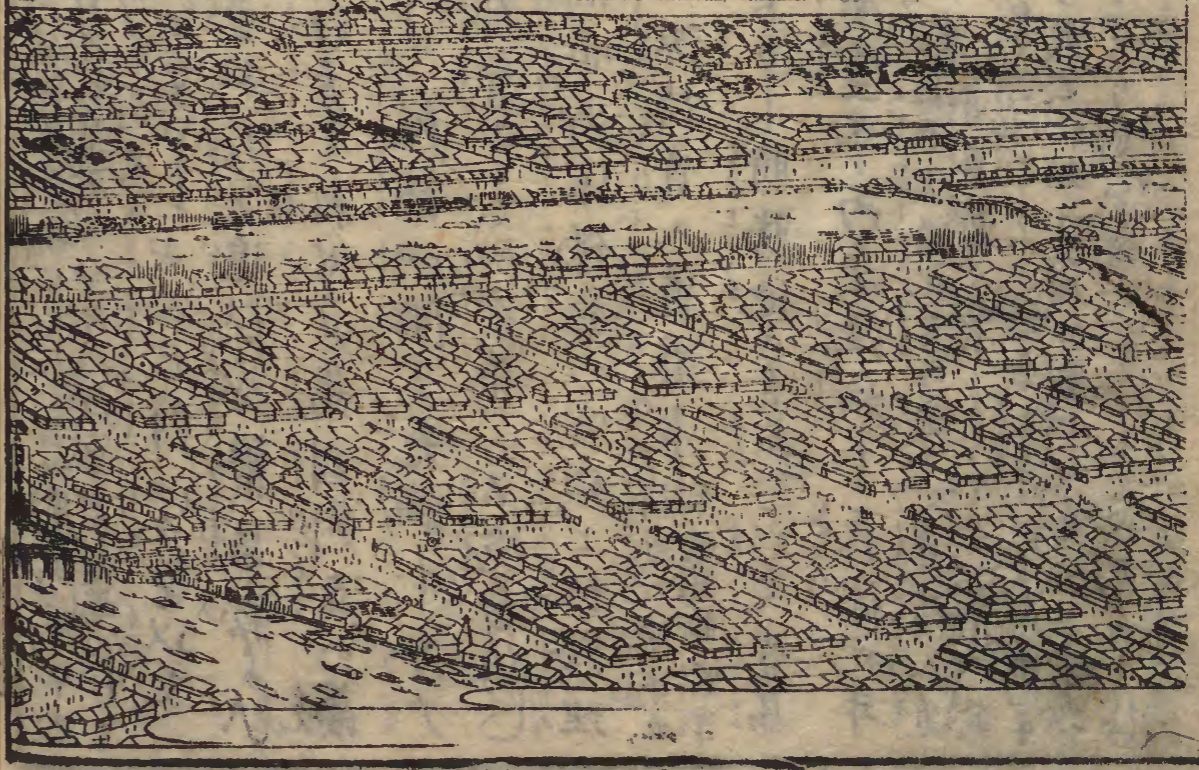
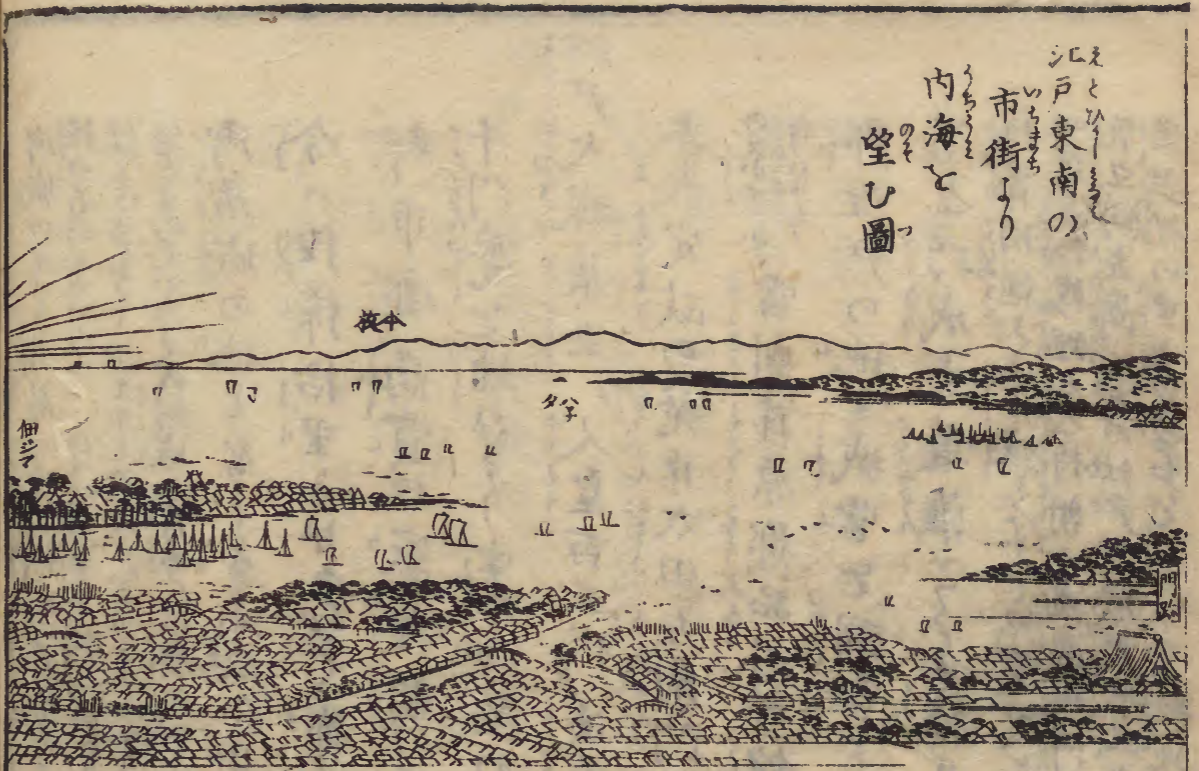
白石先生の説は江戸ハ庄の名あり一云按中古庄と唱へハ郷のゆとのあり
郷里共は佐登と訓を令義解云九五十戸為里と云然る時ハ佐ハ秋登ハ処の畧ハ
と廣大なるの意ハ 武蔵國風土記に荏土不作傳云此地ハ大江に臨
故小江戸と稱せりとの 甲陽軍鑑に江戸の辺を中武蔵と唱ふるあり義
經に云く江戸太郎重長ハ八箇國の大福長者とあり
ある時ハ江戸の地ハ重長領せしなり 南向亭ハ平川と云ハ水
隔て今の三の丸の地ハ江戸の郷日輪寺の方ハ神田郷なりと云ハ平川と云ハ今の
飯田町の下より入堀の水脈是なりと云ハ又同記に今の神田の
迎へ江戸と云く一地あり一 撰州大坂御城内の雁木坂回名を大坂と号く後世

御城の号は呼れあり彼地の惣名とある江戸の名も此類なりと云云寛永二十年册
極のあつまめりとの入册子に彼へのりやと白雲の葉末にむを津草を打越りけ
ほともあく切さりの江戸よつとありとある上の意ハ一と云ふ
ひとあつとありの封域今ハ廣大なるを云ふ 天正己降江戸を以て
御居城の地となし故小日を重ね月を追ひ益繁昌不却
今ハ徑緯拾里よせむく都く江戸と稱せり萬國列侯の藩
邸市麩商賈の家屋鱗差しく縦横四衢は充滿一万户
千門甍を連ねり実ハ海陸の都會中と扶桑第一の名境といひ
江戸大城基立 人皇百三代 後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理
太夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道准 持資の傳第五
の条下ハ 當國荏原郡品川の館あり一 時勝地と云ふを以て豊島
郡江戸の地ハ城宮を闢む一 康正二年丙子經始一 長祿元年

丁丑巧成く道灌くは移り住む 道灌の傳第五
持資相繼く居城とすとのあり 詳なるは鎌倉大草紙に長祿元年
四月上杉修理太夫持朝入道武州河越の城を取立らる太田備中入道ハ岩井の城を
取立同左衛門太夫ハ江戸の城を取立らるるとあり 是と證とす
宝田祝の里とのありと云く城地と云ふ又一説ハ千代田奈田宝田等の三



江戸東南の
市街より
内海と
望む
図



紙名武州河越若竹城壘と築くは千代田城と云ふ其曾持資
或ハ人名す大道寺交山翁云天正の初め東と泊城と呼び西を合雪と
城中之所室とて軒の南を静瀧と号す山水の美を眺望窓含西嶺秋雪門繫
東吳萬里舟と云ふ古人の詩を引く然又文明十八年丙午持資諺害せり
大に稱揚せり此文中の美景江亭記
曾我兵庫次郎の子
同豊後守とて此城を守りしむ
鎌倉大草紙に文明九年江戸の城に
次郎自胤を籠置とあり按は項長尾景春武州にあり兵を催を道灌
戦ひしとあり鎌倉あり江戸の城は是等の人居置し
其後定政の子同五郎朝良同修理大夫朝興共相續て此城あり
一々大永四年甲申 正月 北条左京大夫氏綱より攻落され朝興大
敗走して河越の城に移る是より後ハ氏綱家人富永神四郎 小田原記
政直遠山四郎左衛門 四郎兵衛 某等と城代とてころ不籠置氏康氏政
氏直に至る迄とて四代の間北条家ノ属す
是間遠山富永両家あり
然る永祿の始遠山丹波守富永三郎左衛門兩人北條國有臺に戦死し天正の頃北条治部丞
遠山左衛門守河村兵部守備 天正十八年北条家滅亡の頃遠山左衛門佐景政を小山原
同豊後守丹波守當城を守り 天正十八年庚寅秋 七月 其家没落せり

より己来永く

御當家の御居城と定させられ同年八月朔日江戸の大城へ
台駕を移させし其頃迄は僅そかりの城営とて一々慶長年
間御城廓の地を廣くせし唯今のゆく魏々然とて萬世
不易の大城とハなるべし

江亭記 寄題 江戸城 静勝軒 詩序 公所 肇築 也自
武州 東戸 城者 太田 左金 吾道 源公 所肇 築也 自
關流 東比 公差 肩者 鮮矣 固兼 一世 之命 者八 州内 公才 三兼
風三 籍甚 安危 係于 武一 之命 者八 州内 公才 三兼
州城 可謂 二危 係于 武一 之命 者八 州内 公才 三兼
舟車 之會 他州 異郡 唯以 一人 之命 者八 州内 公才 三兼
峭立 固以 繚垣 者數 以夫 城之 高十 餘丈 懸崖 饒
脉瀨 以鄰 碧架 者巨 材爲 之橋 外有 巨溝 浚而 成鐵 徹泉
門石 其壘 碧架 者巨 材爲 之橋 外有 巨溝 浚而 成鐵 徹泉
中閣 若于 直舍 翼其 側成 樓障 庫廩 之備 軒而 鐵其
爲屋 若于 直舍 翼其 側成 樓障 庫廩 之備 軒而 鐵其
白瑠 屏風 若于 直舍 翼其 側成 樓障 庫廩 之備 軒而 鐵其
一碧 瑠璃 屏風 若于 直舍 翼其 側成 樓障 庫廩 之備 軒而 鐵其



元旦諸侯
 登城圖
 藩邦十帛此朝宗
 關險何須百二重
 四海道通含勃澥
 中原嶽秀有芙蓉
 城地日暖晴雲迤
 邨第春分淑景從
 回望鬱蔥佳氣裡
 車如流水馬如龍
 服元喬

舍者與公缺於躁不躁窮氣則矣室餌之合出而其背月凡萬斯物
雲也公之非一能缺勝之神清慮收之旗日沒南叢曠兮皎馬三狀遊耳
泊其相以盈偏勝盈寒域與者其天衆旄於於海蕪者巒紫天震者早南
船不爭而守冲非而冲熱鬼而詞失以彙泉之房雲之小所而所與絢如出更異東
者知而扁而後正能勝如淨弗克為成杜有別者香至所鹽魚漆泉危呼而散出此藥相
流焉相扁而後正能勝如淨弗克為成杜有別者香至所鹽魚漆泉危呼而散出此藥相
花者戰者軒無也勝如淨弗克為成杜有別者香至所鹽魚漆泉危呼而散出此藥相
老咸者未不所唯熱靜之不其機氣為後乃養弗懼也其於神發之而於散出此藥相
人謂蜀公中之有勝熱可清勝能靜瀟矣道其於神發之而於散出此藥相
倦威也無所謂不天於正矣非寒皆帶夫而曰無其言正此藥相
遊愛能謂可勝下於一勝能曰人成有寧於散出此藥相
之能境俾人以勝則正矣非寒皆帶夫而曰無其言正此藥相
扁竹所懼矣及而如正間也非帶夫而曰無其言正此藥相

以松此地同此景插以瀛名在公乃吟中一風流爾聽
亦者六十年矣丙申夏適介是以請及題下其能言之蓋
予三我予未嘗於後書于適介是以請及題下其能言之蓋
序可也也我予未嘗於後書于適介是以請及題下其能言之蓋
吳昇也也我予未嘗於後書于適介是以請及題下其能言之蓋
秋八月也也我予未嘗於後書于適介是以請及題下其能言之蓋
統而之指于一室辭幸關左人要屬能言之蓋
為序乘也子所歌之擊迹以告
文也子所歌之擊迹以告
明也子所歌之擊迹以告
八年詩與政申

傳聞靜勝軒中景四面窻扉一之野閣青丘吞帶
芥天晴碧海無期望泊船處關心西嶺成堆塊火如徒遠
樹來我老無期望泊船處關心西嶺成堆塊火如徒遠
去吹雪聲中築受降聞若延客日臨總風帆多少載詩
籍々威名關以東又知天下有英雄鼓擊龍不超遠城
靜驅使江山入鼓中又知天下有英雄鼓擊龍不超遠城
江戶城高不可攀我公蒙氣甲東關三州富士天邊
雪收作青油幕下山我公蒙氣甲東關三州富士天邊
雲連雪嶺水連吳城上軒窻閑畫圖最愛似留行地
日碧天低野入平蕪

古壯遊之凡士有志於四方者必以經山左野東
之為壯先登焉凡士有志於四方者必以經山左野東
年時田而登焉凡士有志於四方者必以經山左野東
是為恨項間而登焉凡士有志於四方者必以經山左野東
武州甲兵戶四城間而登焉凡士有志於四方者必以經山左野東
之為城於甲兵戶四城間而登焉凡士有志於四方者必以經山左野東
險萬虜下不進亦在十萬有田左然今則左者
景萬天不進亦在十萬有田左然今則左者
曰有寔下不進亦在十萬有田左然今則左者
四泊則此西齋特置一稀武據州之要而堅備其東之為州也邦一也
筑此山則軒此乃北四富士觀武庸勝野若軒是為勢城甲有樓也
一託其登此軒也乃北四富士觀武庸勝野若軒是為勢城甲有樓也
軒東遊之西到也此軒也乃北四富士觀武庸勝野若軒是為勢城甲有樓也
屬正中東遊之西到也此軒也乃北四富士觀武庸勝野若軒是為勢城甲有樓也
求且後題不具陳躬歷其地命師題者入而後宗觀之於就予序
未為復傳肯拒辭輒用所知者如往宗觀之於就予序
在希世靈八金龍吾集丙申八吉書于岩栢之志尚
巷希世靈八金龍吾集丙申八吉書于岩栢之志尚

寄題左金吾源大夫江亭

士嶺衝天東海瀾靜中勝景畫中看一山暮
鵬載泊前灣晚照殘中勝景畫中看一山暮
華構臨江天字低北帆南楫日斜西髯端雪白漁竿
客萬頃玻瓈可釣齋帆南楫日斜西髯端雪白漁竿
地西嶺當窻亦賢江亭赤壁休誇前陽東漢樓千戶二波黏
中仙憑誰說與蕪夫子赤壁休誇前陽東漢樓千戶二波黏
士嶺衝天東海瀾靜中勝景畫中看一山暮
庶經籍滿床羅北一亭新架有高城閭東樓勸
光晴丹青難畫戰圖外惟幄運籌張氏情籬茅舍育暮
左金吾源大夫江亭記冠武冠者大國也連山可木奇傑
關左形勝之雄江武為之冠武冠者大國也連山可木奇傑
而兼要嶽者江戶武為之冠武冠者大國也連山可木奇傑
為綠不燕白沙江戶武為之冠武冠者大國也連山可木奇傑
佳木蔚然日之將晚也北翠登丹崖然帶之高峙珍卉
也攀蔚然日之將晚也北翠登丹崖然帶之高峙珍卉
山水歷以爲中秀迺左四吾公直夫之文所築新佳
山以水歷以爲中秀迺左四吾公直夫之文所築新佳
以翼然乎其家中東武之乎一北都而白揚一紅益二之亞
以翼然乎其家中東武之乎一北都而白揚一紅益二之亞

也東望則平川縹緗長堤綏迴水石瑰偉兮
鬱芬掩映乎淺草十濱白瀛補洛妙境之神
與滄洲其前則百谷與海會而吳楚東南
則滄洲其前則百谷與海會而吳楚東南
一此乎當關則東國與安世周知蒼天
公柵於斯外謂敵之東國與安世周知
曰靜勝可與敵之東國與安世周知
羣山隔岸雲積水天以密行武也
人畫也岸雲積水天以密行武也
桂漿舸經舟小如織而龍赤藉以
寤寐矣哉縮躬如織而龍赤藉以
襟宇滄海即指以詩鳴其雅也
是湘中僧以詩鳴其雅也
成其山水之美以詩鳴其雅也
中章亦寓之於詩鳴其雅也
文公求之於詩鳴其雅也
聊以之邪然督責弗乙而云爾
秋也相與暮景得之曼而云爾

文明六年六月十七日江戸城二道権奇合を興す

心敬 資俊 惠仲
資雄 好继 資忠
平盛 快美 長治
音譽 ト巖 資常 宗信
道権 珠阿 宗信 瑞泉坊

孝範家集 二月十三日 聖廟法樂 静勝軒 太田

宗長東土産 杉や 松は 杉の香 杉のつゝか 杉のつゝか 杉のつゝか

翁とひき松はく田鶴乃 終り、の那

を山平 杉は 朝戸 上杉 建芳

吾も今朝 あまは 杉のつゝか 杉のつゝか 杉のつゝか

一日つ 杉のつゝか 杉のつゝか 杉のつゝか 道権

此和歌 太田道権静勝軒の合雪亭ありて詠し

宗牧東園紀行

一日天氣よくく江戸の城ははるく遠山甲斐守千人を
つゝあれは種なき先旅宿の来り云付られしよりあはれ亭主
宗三とて和泉塚居あれは時宜んやせし城より使明後日
上徳園へ出陣の侍もむりお一層懇望けしゆり色
故障ゆいとの由再往なせしも不及了簡あられせしを
昼川くより始られより杯中一順の為とて取あて

五 庄くくも花小あけけしゆり子里う那

此城の遠望下は運籌帷幄中決勝千里外これあはれ
つゝく祈ししもとうあり又六日大田越前守無杉の
中まきりこきハ小田原あての義約とすなりう止るに
明日息孫を齎出陣あはれハ取討を待しゆり
糾紛同心あはれき執心あはれハ最向のともはしゆり
花下くぬ 経路あはれふくむる色も一の形

んをたるまきりなぐり一層とくまてふ益多し
立陣をせしむる連秋のゆりそんをり立きき舎矛西堂の
えりりかこく例の駱駝このかこふ富士見の亭一見こ
るしと中あれハ富永とてへ會席よりたれきゆり
くくほくありあはれ又小田原よりきき何り色し
りりり掃除なせしゆり迎の岡松のくむり
入江かけしゆりもむりつふあはれみあはれ
あはれ月心くゆりあはれけり暮りてくれハ富士も
あはれけしゆり中あはれり武蔵野の眺望あはれ
ほくくく東の矢く又荻坂波山の亭とて遠浦
帰帆むきしゆり夕月夜盃あはれり

園もあはれは白雲のともふりゆり

鳴ら出陣又守へ詠進一かきあきしり各異見の事
てまのあきと忌まきり七日あきまきりきれ軍勢
しりあきしり云々
始一四日とあり天文
十四年三月なり

吹上御庭 旧名を局澤と云

按吹上は江戸は橋の高き地なり
駿州富士川の辺武州荒川の辺吹上と云

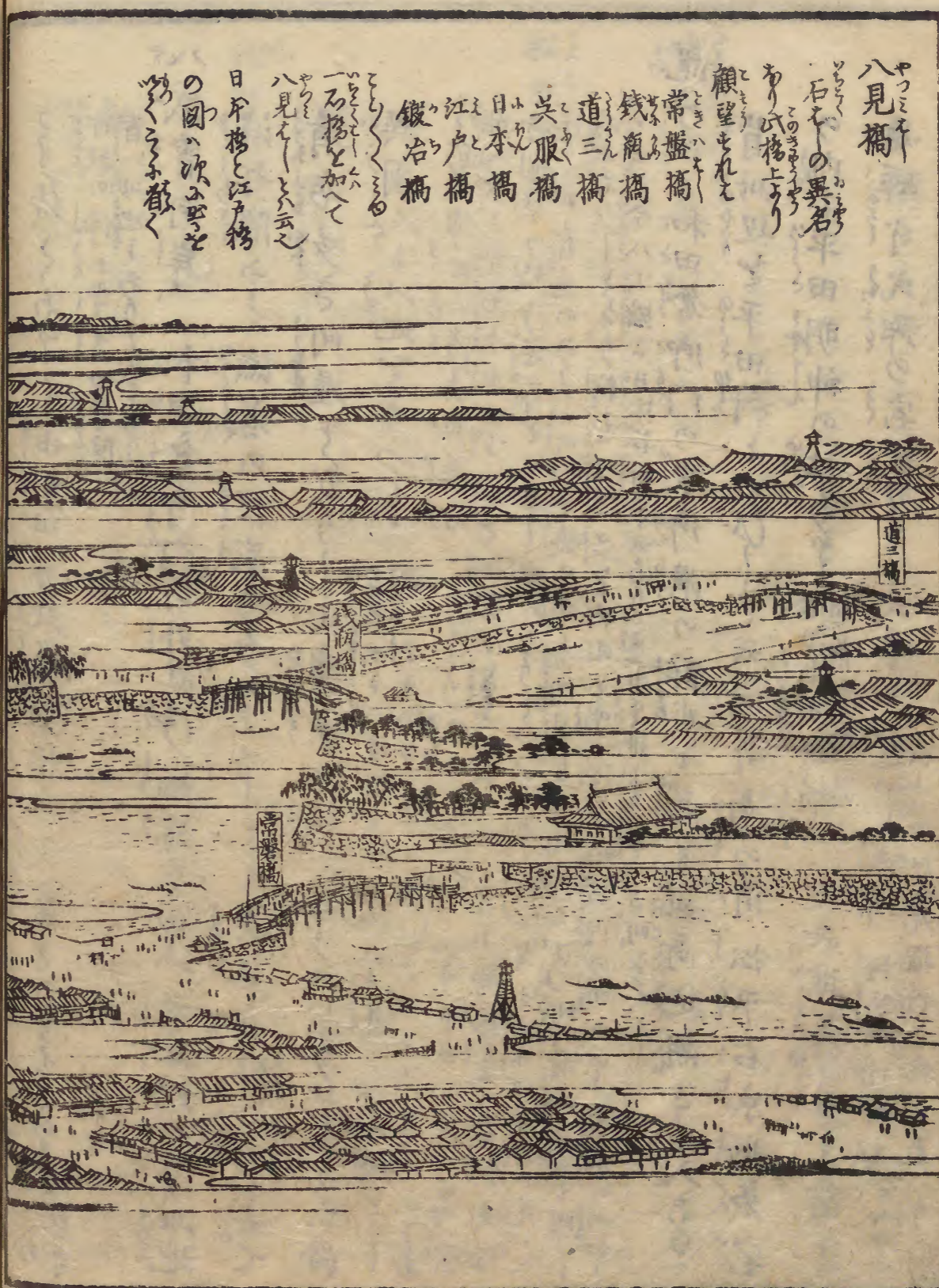
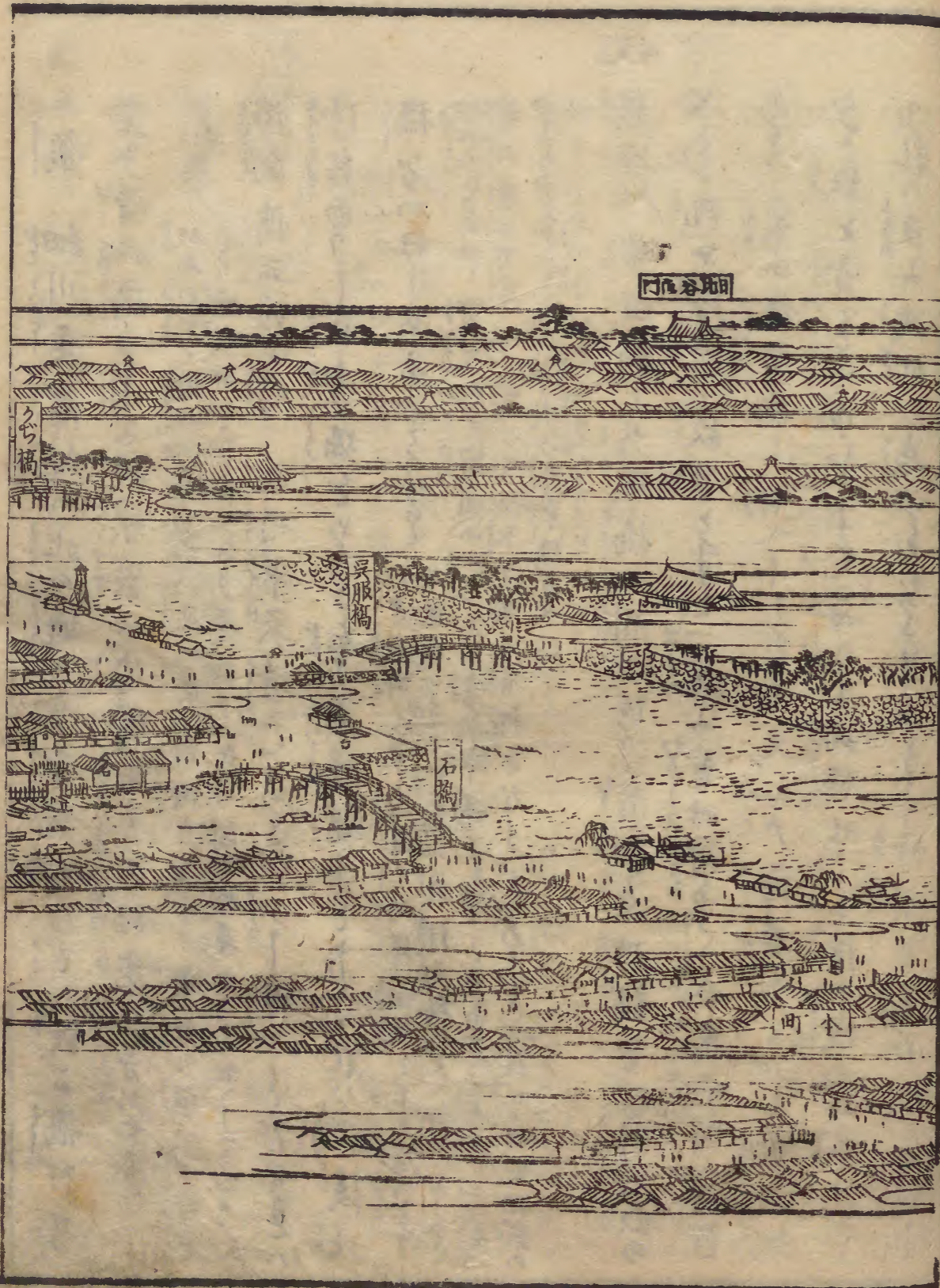
松原小路 田安御門の内なり昔此地松原やくありしを結城黄門公
御館を建られて木立の御館と呼々々
往古太田道灌我庵
松原は吹上より北なり

梅林坂 平川口御門の内なり文明十年の夏太田持資或日一室不
ありし中霊夢を感じ翌日菅公親筆の画像を得て
梅樹數百株を栽依り梅林坂の号なりと云

八代曾河岸 和田倉御門の外に砂堀端をり天正以前此地
波打際ゆく漁者の住家のみなりしと云其後日比谷町と云て
看店多き町屋と云り慶長の頃ヤサスハチクワンと云り
異國人は此地をあつと云

龍の口 和田倉御門の東御満の餘水を落す此所迄潮と入あり
昔此辺を平田村といひしと云同所南の角松平右京兆新宅
の内平田明神の社あり
飛驒守氏郷の宅地なりと云

龍の口 和田倉御門の東御満の餘水を落す此所迄潮と入あり
昔此辺を平田村といひしと云同所南の角松平右京兆新宅
の内平田明神の社あり
飛驒守氏郷の宅地なりと云



八見橋
 石橋の異名
 ありは橋より
 顧望せられ
 常盤橋
 銭瓶橋
 道三橋
 呉服橋
 日本橋
 江戸橋
 鍛冶橋
 一石橋を加へて
 八見といふ云々
 日本橋と江戸橋
 の間へ次々
 増くると散く

道三橋 細川侯藩邸の北の通より常盤橋の方へ渡る橋は号

とす昔此橋の南は典藥寮の所醫官今大路家の茅宅あり

とあり故小此道三河岸との延宝園は内河岸とあり慶長の頃ハ柳町と

俗間傳云く時 大將軍家道三とめたる以て遅くしてりるハ

涉智あり一昨涉堀をりつるお小其道遠くと申上るれハ其後此

橋をわけしめあつたなり

住宅と云く寛文江戸繪圖は此をを彦次郎橋とあり又大尊寺支

翁云道三河岸所入國の項林木渡世の者軒をかりてあり一後年彼地武家の

錢瓶橋 常盤橋と呉服橋の間より昔初く此橋を架け時錢の

入る瓶を堀得一故号とすと一説は昔此所より永樂錢の引替

あり一お小錢替橋と唱へてあり又江戸徳鹿子云く昔此地

を錢を賣との市をりて毎口は両替せし後ハ錢賣多あり

これハ互は渡世の為めとあり一と申間を定めける依る

其項錢買とと云ると云云

江戸鹿子江戸雀等の冊子は錢龜

より寛永十八年印本よりその語とつる冊子は天正十九年の夏伊勢与市と

常盤橋 御本丸の大手より東の方本町への出口中より御門あり

橋の東詰北の方ハ御高札を建たる金葉集小色かへぬ松り

よとくわのの糸盤の橋よつる藤波といはる古奇乃

意を松平の御称号よりあり御代を賀しよりての号ありといはる

按此橋の旧名を大橋といひ傳へるハ誤なり慶長十二年の江戸繪

綱小今の御本丸の下衆橋を大橋とあり同圖ハ常盤橋をハ

一石橋 日本橋より二丁斗西の方同一川筋よかる此橋の南北は

後藤氏両家 金座後藤庄三郎の宅ありお小其昔五斗りといふ秀

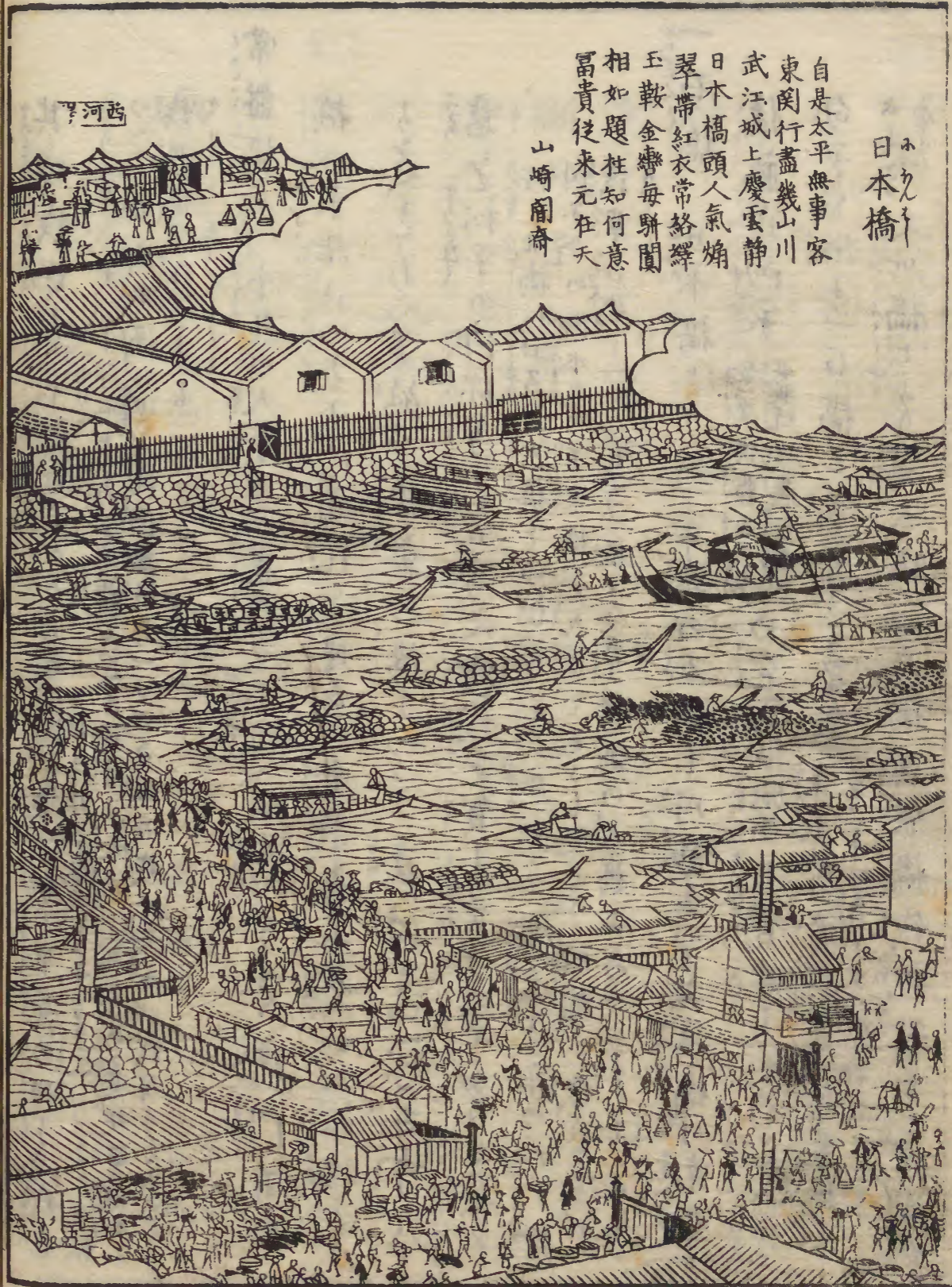
句あり俗ハ一石橋と号けしとあり

寛永の江戸繪圖ハ後藤橋ハ

あり斗の音トウなり

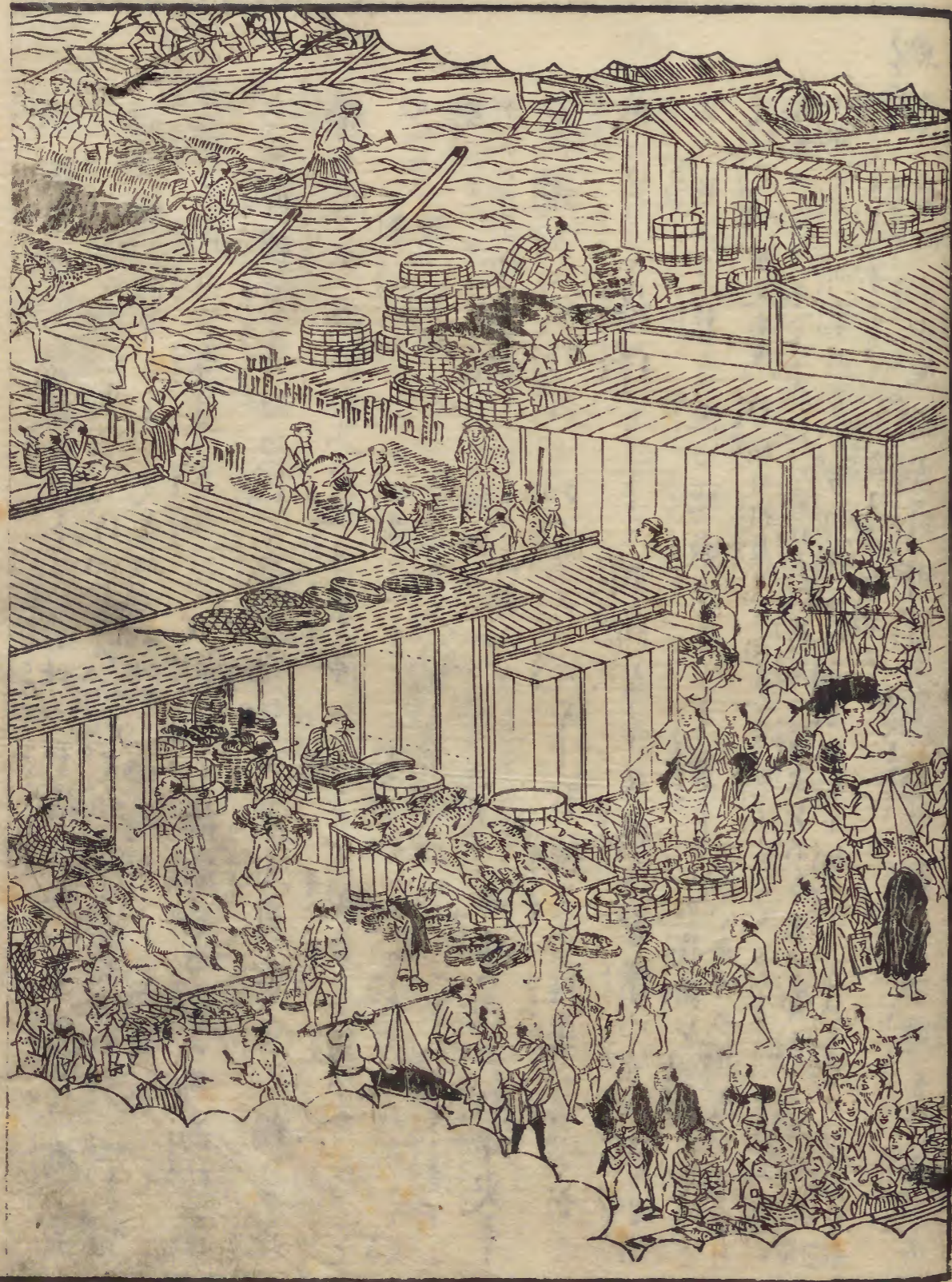
又此橋上より日本橋江戸橋 呉服橋 錢瓶橋 道三橋 常盤

橋



自是太平無事客
 東関行盡幾山川
 武江城上慶雲靜
 日本橋頭人氣煥
 翠帶紅衣常絡繹
 玉鞍金轡每駢闐
 相如題柱知何意
 富貴從來元在天
 山崎蘭奇

日本橋



日本橋
魚市

橋 鍛冶橋等を願望する。故に此一石橋を加へて共々八橋と云

日本橋 此橋の南詰東の方へ河岸を西河岸町の檜木河屋多に住する有

らる欄檻葱宝珠の銘も萬治元年戊戌九月造立と鐫す此

橋を日本橋といふハ旭日東海をゆると親見ふ故に号すと

事跡合考よ云日本橋の考へを記せりこれと北条五代記永樂城附禁の

慶長十一年の極月八日武州江戸日本橋高札と此地ハ江戸の中央

一と諸方への行程も此あり定めむ橋上の往来ハ貴とあり

賤とあり絡譯とあり又橋下を漕つて魚船の

出入且より暮に至る迄敷々と置く北の橋詰を室町一丁目と

又ハ尼崎屋又右馬の拜領の町屋なるもの多し畧しくかくもい

川路と品川町裏河岸と号針鉄物の店多き故に針店といふ又東の

魚市 船町小田原町安針町等の間悉く鮮魚の肆あり遠近の

浦より海陸のけりありなく鱗魚をろよ運送して日夜ハ市を立く甚賑と

多金を生くやんをりこの哉 芭蕉

帆をかりのさつや薫る風 女角

祇園會津旅所 大傳馬町二丁目の乾の角よあり

同屋の住す此街は年々正月十九日の夜ハ其宮所ハ神田明神の

地より祭神ハ五男三女あり 是をハ王 毎歳六月五日本社

よりくる神幸ありて同八日帰輿を又小船町を旅所とする

をのハ同十日ハ神幸ありて同十三日帰社あり是も官居も神止

明神の社地ありて祭る神ハ奇稻田姫中々是を本所前と

称せり何れも旅所は遷幸の間ハ日夜参詣群集して一時の

賑ひかり

通町 北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中



駿河町
三井呉服店

元日の

の
せん

石二

の
山

の
屋







祇園會

大傳馬町柳液所

五元蕉

天王の九様本と

聖のふ

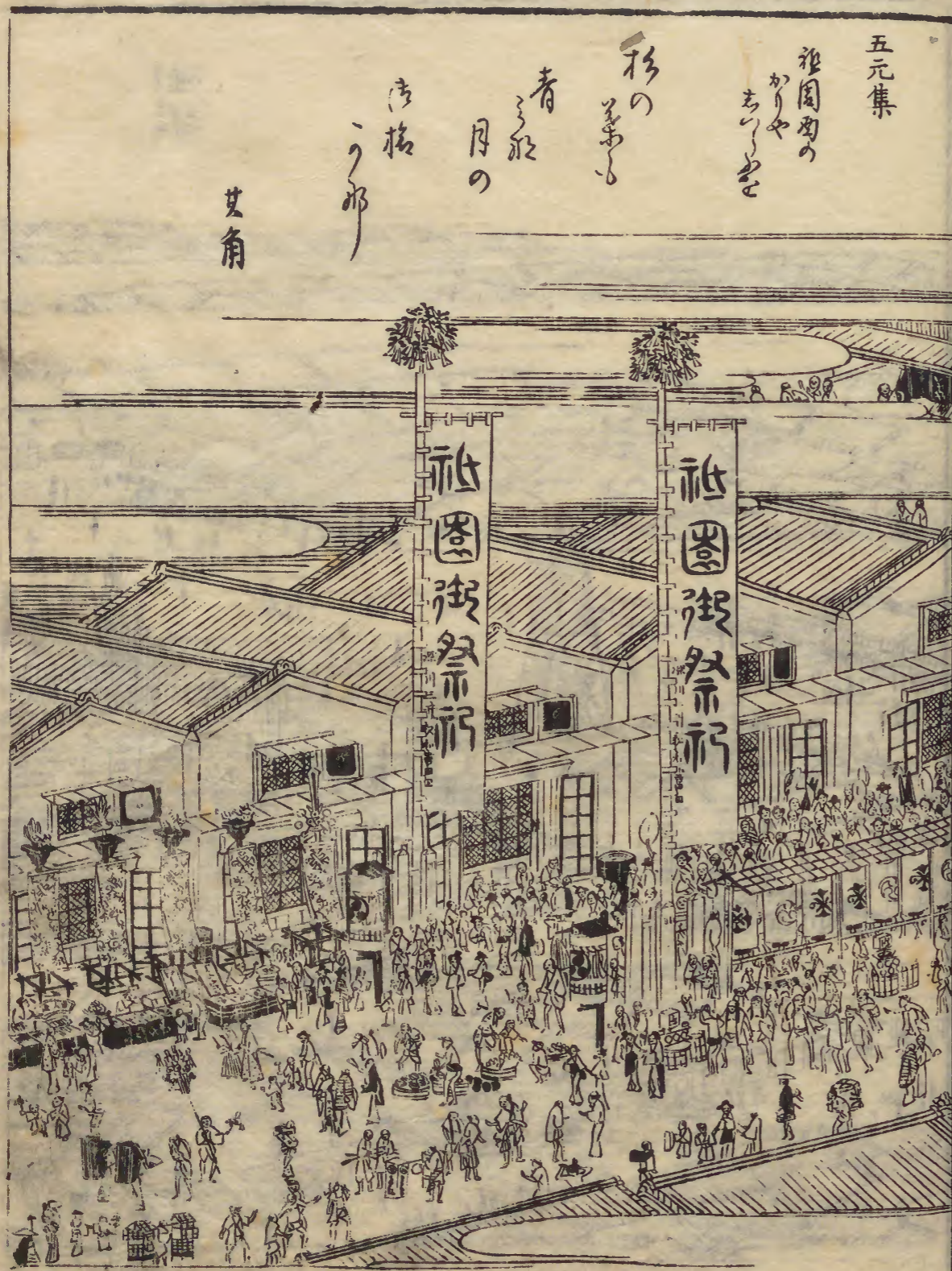
教

の

の

の

橋京橋新橋を徑く金杉橋の辺迄の惣名やと町幅十間餘あり
 浮世小路 室町三丁目の間の東の横小路を云ふれと其故を考へ
 或人云畳表浮世即産商ふせせりなふりふと又ハ風呂屋遊女の居り
 軒店 本町と石町の間の大通を以て桃の佳節を待得て大
 裡雜裸人形手道具等此廊軒端を並へり端午ハ胃人
 形菖蒲刀らふ市を立く其賑ひをとり 弥生の雜市よれと
 らす又年の暮に至れハ春を迎へ破魔弓手毬破胡枝を商ふ
 共ハ其市の繁昌言語も述及すへり 實ハ大平の美とも云
 か 駒込尾張町茂草茅町池の端神町廻町
 時鐘 石町三丁目の小路ハ何と辻源七といふ者是を従す此鐘
 初ハ赤城内ハありと云ふ 其京都城の鏡子ハ有く候時を報す
 川町上野芝切通市谷ハ備目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等あり
 銘曰 宝永辛卯四月中泥鑄物御大工推名伊豫
 藤原重休



五元集

祇園の

かりや

杉の

星

者

月の

花

うら

女角



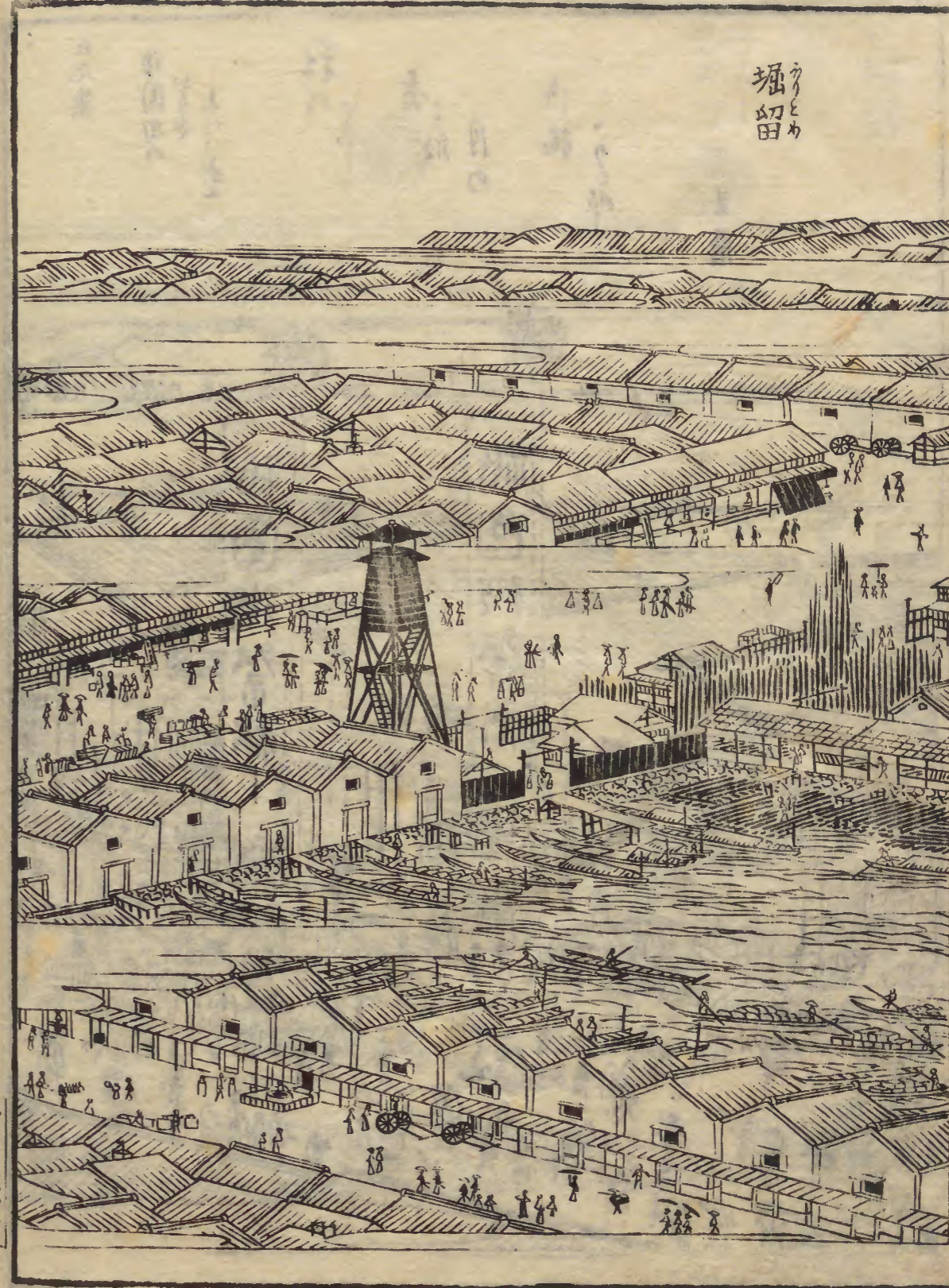
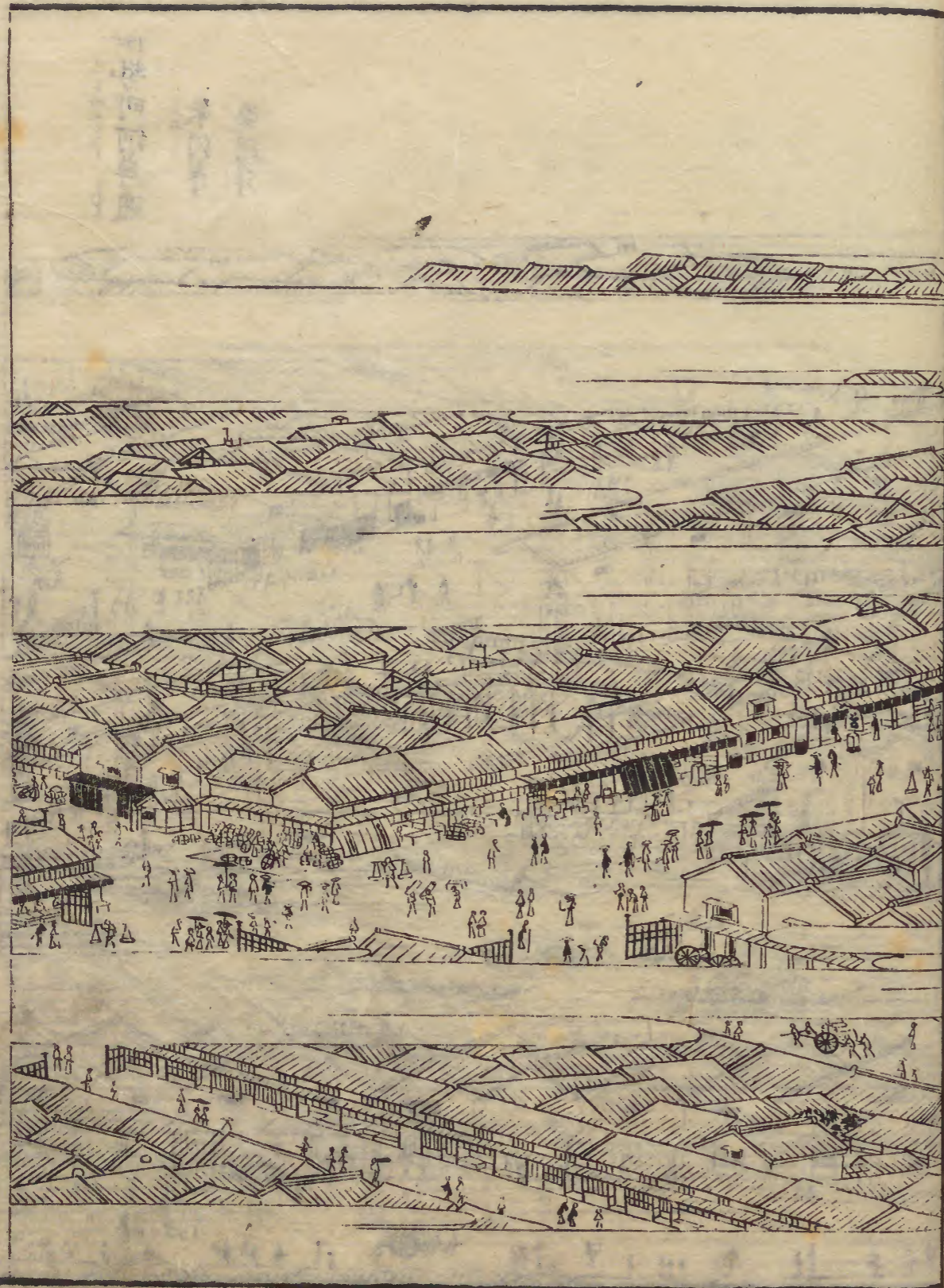
小舟町

祇園會

御旅所

天王御祭礼

天王御祭礼





伊勢町河岸通
米河岸
塩河岸





概々宝永七年十一月十九日誓願寺前より出火一石町のあり覺七すも頃此
鐘山焼くありおふ翌る宝永八年鑄直されりあり

福田村舊跡 本石町一二町本銀町一二町の辺其舊跡なり云

傳々大久保主水屋敷内小福田村と村も宮居ありむろ一福田村の頃
鎮守あり今本銀町一丁目小旗橋と三寶院滅大壽院

千代田村舊跡 錢炮町のあり昔の千代田村ありと云り
今小傳馬町の裏の小路

千代田村舊跡 相殿に諏訪明神を勧請す此地の里正宮也其昔
忍岡の麓あり宅地に移りたり其瑞穂瑞穂の里なり或人云北宮ハ

寛正中太田道灌の弟千代田若狹守の勧請なり此名ありと云れども道灌ハ
吾狹守といふ同胞ありを考へて又忍岡也此名を云す

本銀町封疆 明曆年間火災を除く一めんふ是を築一む
今靈巖島本銀町

今川橋 本銀町の大通より元衆物町入渡橋を云此堀を神田堀
と号く元禄四年辛未堀割と云す頃此地の里正と今川某と

云々れハ直ニ橋の号ニ呼ぶると云今此橋詰の左右ニ陶器廠あり
又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を御菓子司大久保主水

の宅ある故ふる云リ宅前ニ井あり主水井と云昔ハ沙茶の
水ありとせられしと云り

中ノ橋地を通らせある頃主水の宅を併せり又半井ト養一一首仕る
と云由仰りありこれハト養とありありと大橋を通ぬと云れり

但その家の傳々云々ありと云り

神田明神舊地 神田橋の内一橋沙館の中より清浄を
今存せり 開年九月十五日祭礼の夜ハ神輿を
村と云 小田原北条家の古文書小太田大膳亮 其昔ハ浅草の日輪寺と

芝崎道場といひく此地よありと云り又神田と号するハ傳へ云

往古諸國伊勢大神宮へ新稻をまきふる國中ニ稻を植る

の地あり是を神田或ハ神田河田と唱へしと云り此地ハ當國の

神田なり故大己貴命ハ五穀の神なれはと云ふ斎と云

神田明神と号けり

神田橋 大手あり神田への出口小架を御門あり昔此地ハ土井大炊

の宅ある故ふる云リ宅前ニ井あり主水井と云昔ハ沙茶の

水ありとせられしと云り

中ノ橋地を通らせある頃主水の宅を併せり又半井ト養一一首仕る

と云由仰りありこれハト養とありありと大橋を通ぬと云れり

但その家の傳々云々ありと云り

神田明神舊地 神田橋の内一橋沙館の中より清浄を

今存せり 開年九月十五日祭礼の夜ハ神輿を

村と云 小田原北条家の古文書小太田大膳亮 其昔ハ浅草の日輪寺と

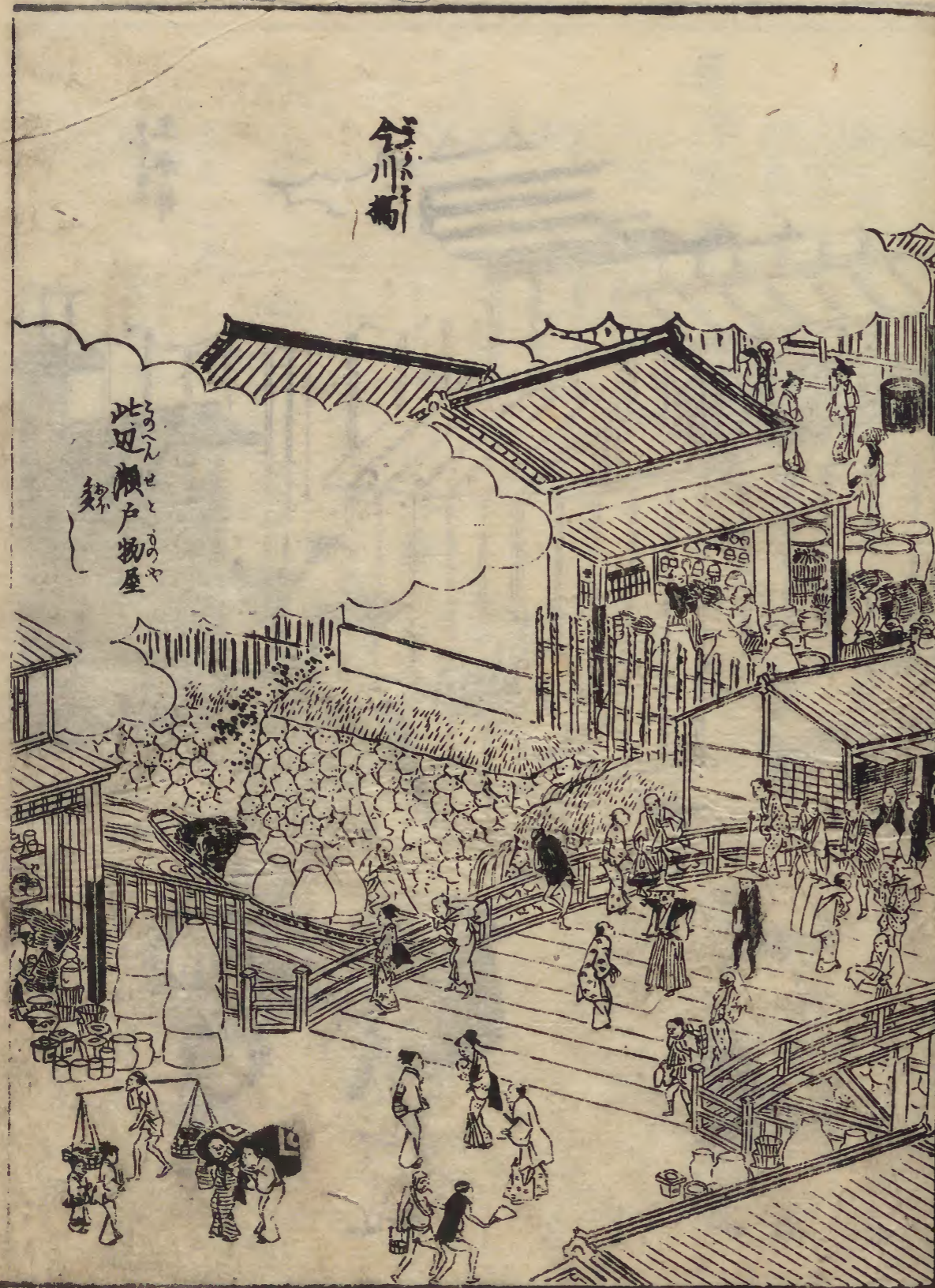
芝崎道場といひく此地よありと云り又神田と号するハ傳へ云

往古諸國伊勢大神宮へ新稻をまきふる國中ニ稻を植る

の地あり是を神田或ハ神田河田と唱へしと云り此地ハ當國の

全川新

此辺瀬戸物屋
多し



主水井



侯の弟宅あり一故不又大炊殿橋とも号するなり
橋の外小茅商人あまの住す今の八丁堀の茅場町是なり又其後
此の町をまへて神田と号く
事考合考
云く昔ハ神田

護持院舊地 神田橋と一橋との間
護持院と号られ殿堂亦建立あり一
知足と号れ

大塚護持院の舊址なり
元禄年間柳原の南あり
護持院と号られ殿堂亦建立あり一
知足と号れ

田舎の邊大塚の地へ
移され後明地と号
林泉の形残る頗る佳景なり
夏秋の間ハ是を

削りせしと都下の人々遊ぶるをゆるさる
冬春の間ハ時として

大将軍家々々沙遊獵あり故に此所を新駒原とも唱ふる

と号り世俗ハ護持院の系と呼ぶ

瓶ヶ淵 元飯田町の東の入堀を号く
蟋蟀橋と云ハ同所北の

市の小溝は架を石橋の号なり
又小川町より九段坂へ向ふ所の

橋を今魚板橋と唱ふ
又組橋と云ハ
これと其所以をあるハ
江戸名勝志

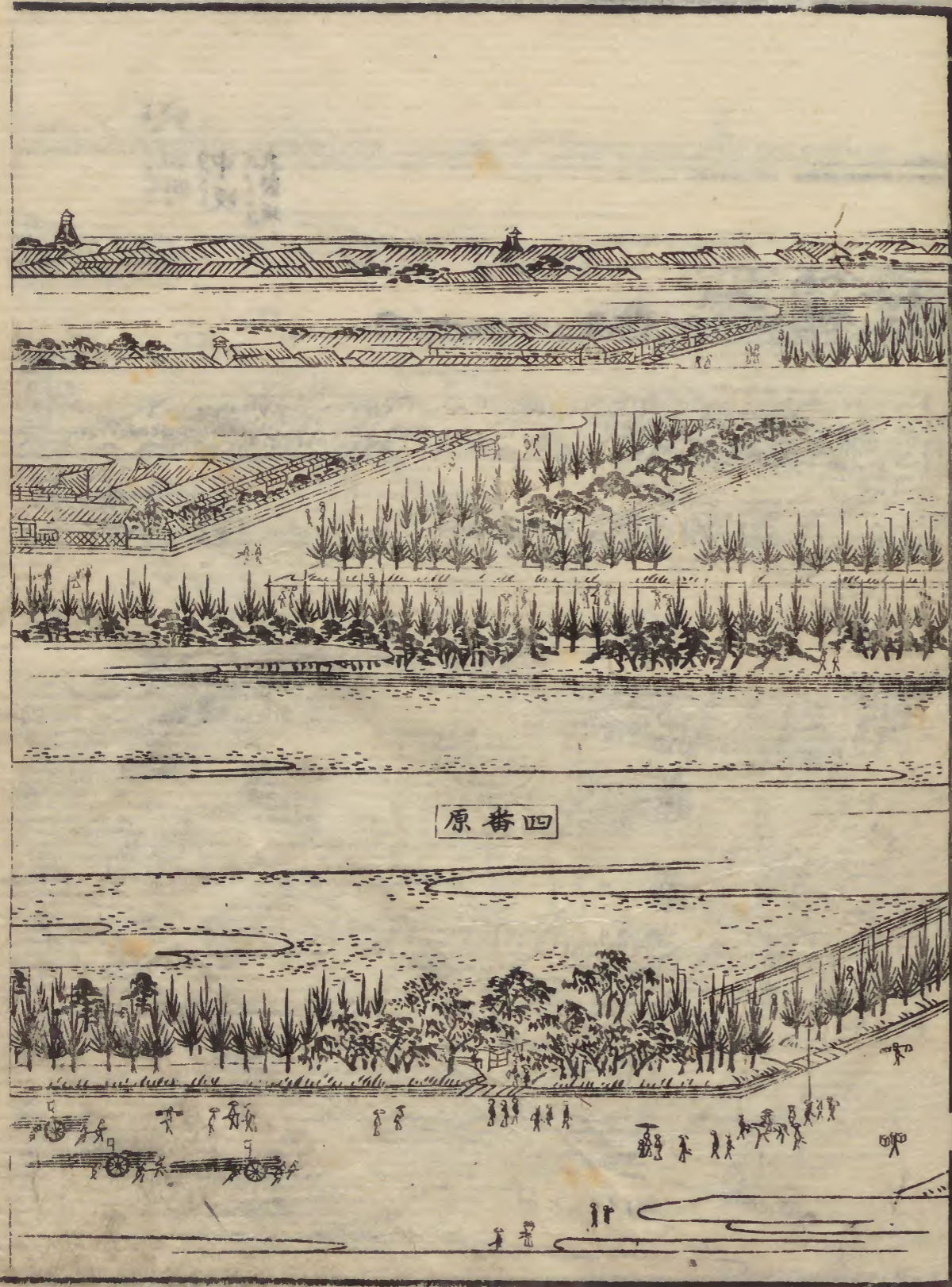
田川と云ハ
世継稻荷ハ飯田町の中坂ハ
阿豆文安の頃より此地に

何年二月の末鎌倉町
 酒樽の酒店
 酒樽の酒店
 と商ふ是と未ん
 とく遠近の輩
 黎明より
 肆前より市と
 賑ふ



鎌倉町
 豊島屋酒蔵
 白酒を
 商人

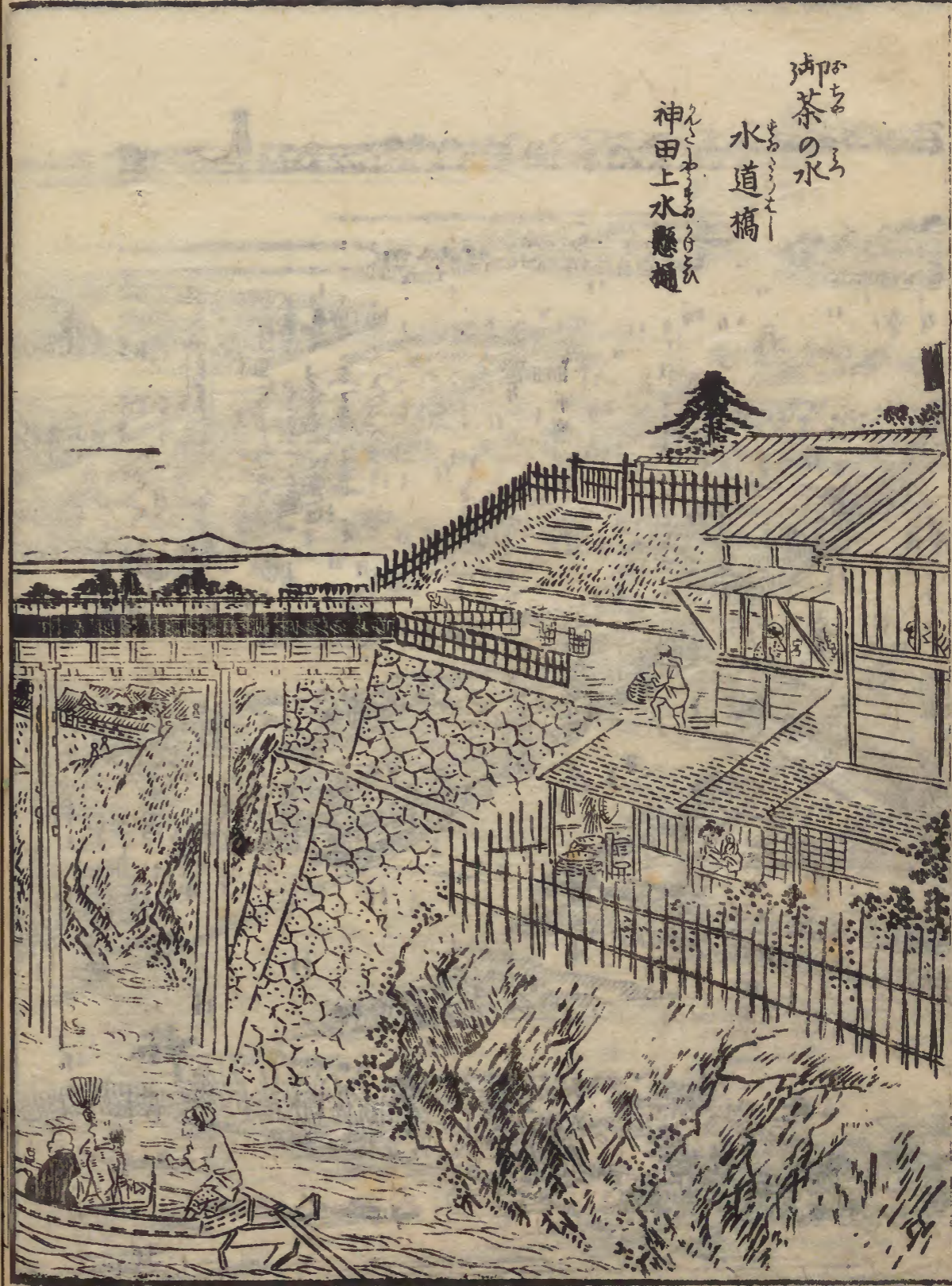






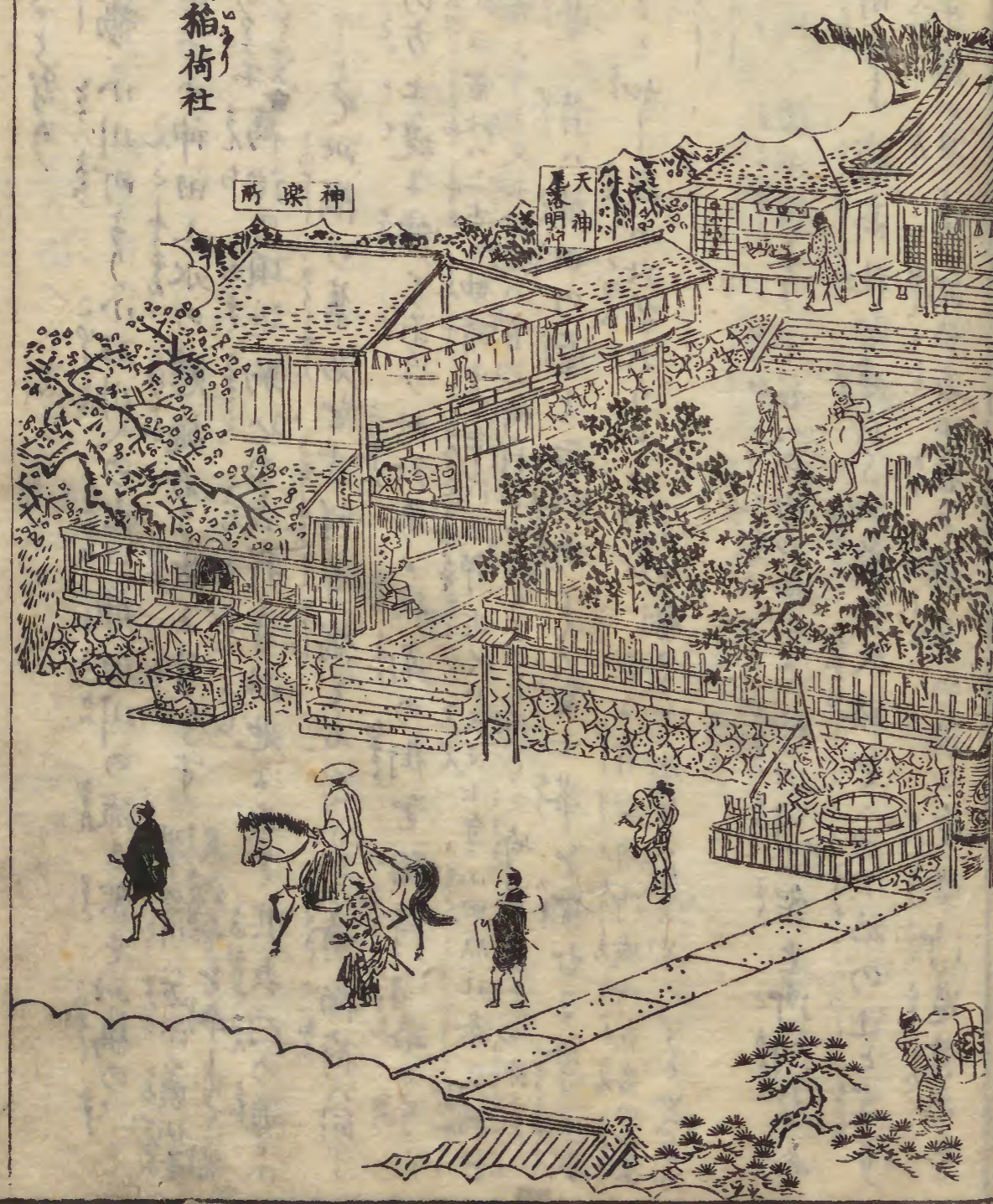
飯田町
中坂
九段坂





御茶の水
水道橋
神田上水懸樋

三崎
柏荷社



本社



たるとなり

水道橋

小川町より小石川への出口神田川の流を架す此橋の火

下の方小神田上水の懸樋あり故に号とす

此下の川、万治の頃仙臺

割らるゝ萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地にあり其表門の通り小

ありしと云此橋の舊名を吉祥寺橋ともつり三崎稻荷同

西の方土境に傍てあり此社ある故南の街を稻荷小路と号く

社記云當社ハ二古の勸請ゆへ神代不詳近くハ天文七年小田原北条氏綱は

造営せりと又云此地ハ昔三崎村と云ひしを因り三崎のありとも稱す

河基昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むは掌に

視る如し故に此名ありと云是

勸違橋 須田町より下谷への出口中々神田川に架す河門ありて

此所ゆへ高札を建らる此前の大路をハッ小路の辻と字す

昌平橋ハ是より西の方小並入湯島の地小聖堂河造営あり

一より魯の昌平郷は比して号けられしとなり初ハ相生橋

あつり橋又芋洗橋とも号ゆるり太田姫稻荷の

祠ハ此地終路坂の上あり旧名を一口稻荷と稱す

新國會ハ又東小柳森稻荷社あり並に拾遺

神田川

江戸川の下流中々湯島聖堂の下を東へ流大川に

入明暦より万治の頃小至り仙臺迄 台命を奉り湯島

の臺を堀割小石川の水を初てう小落と云信つるを

少く誤り小似り古老の説ハ慶長年間駿河基の地開け

一取小至り水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけし

其土を以て土境を築き内外の隔となしと云此説あり

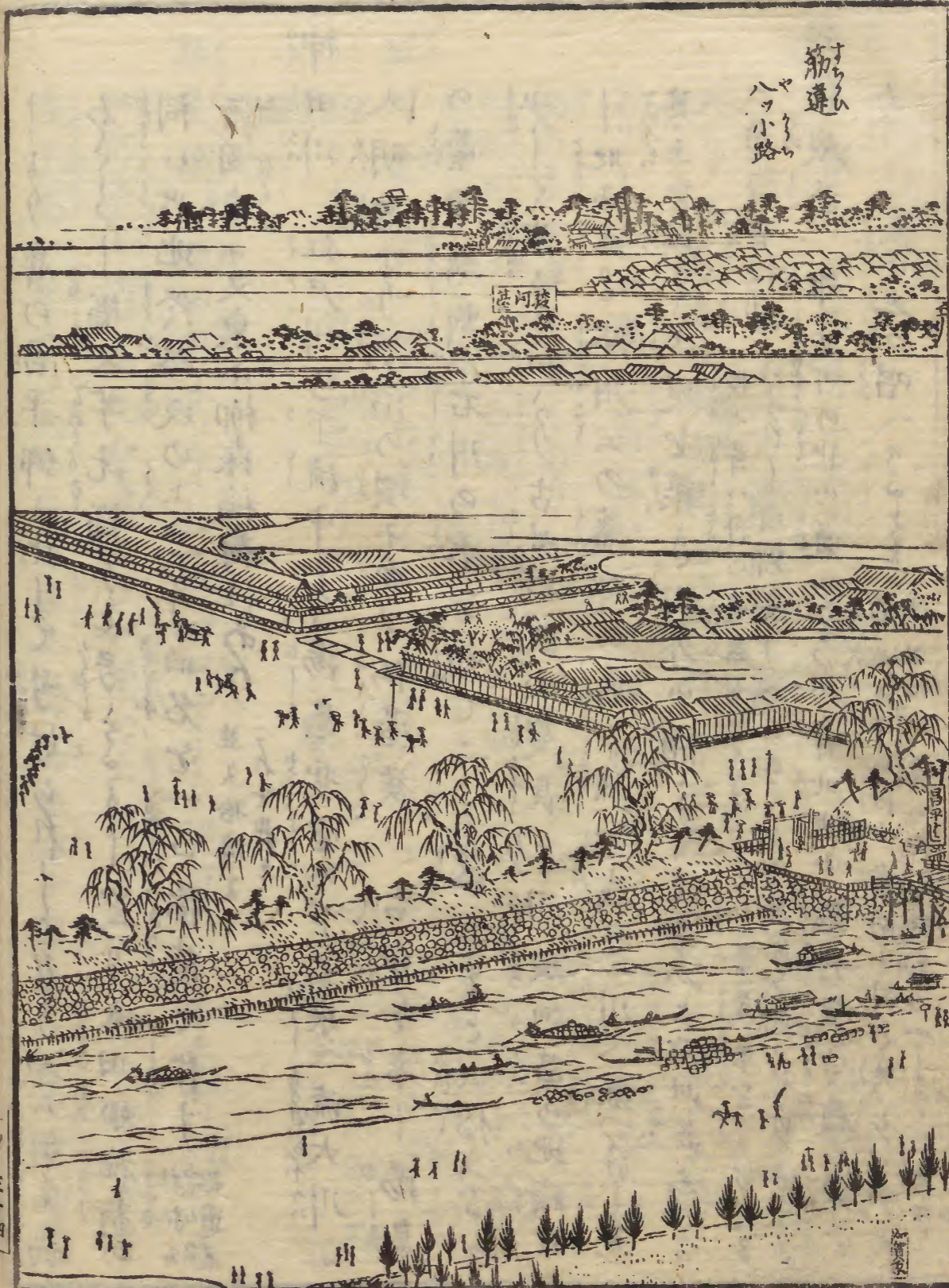
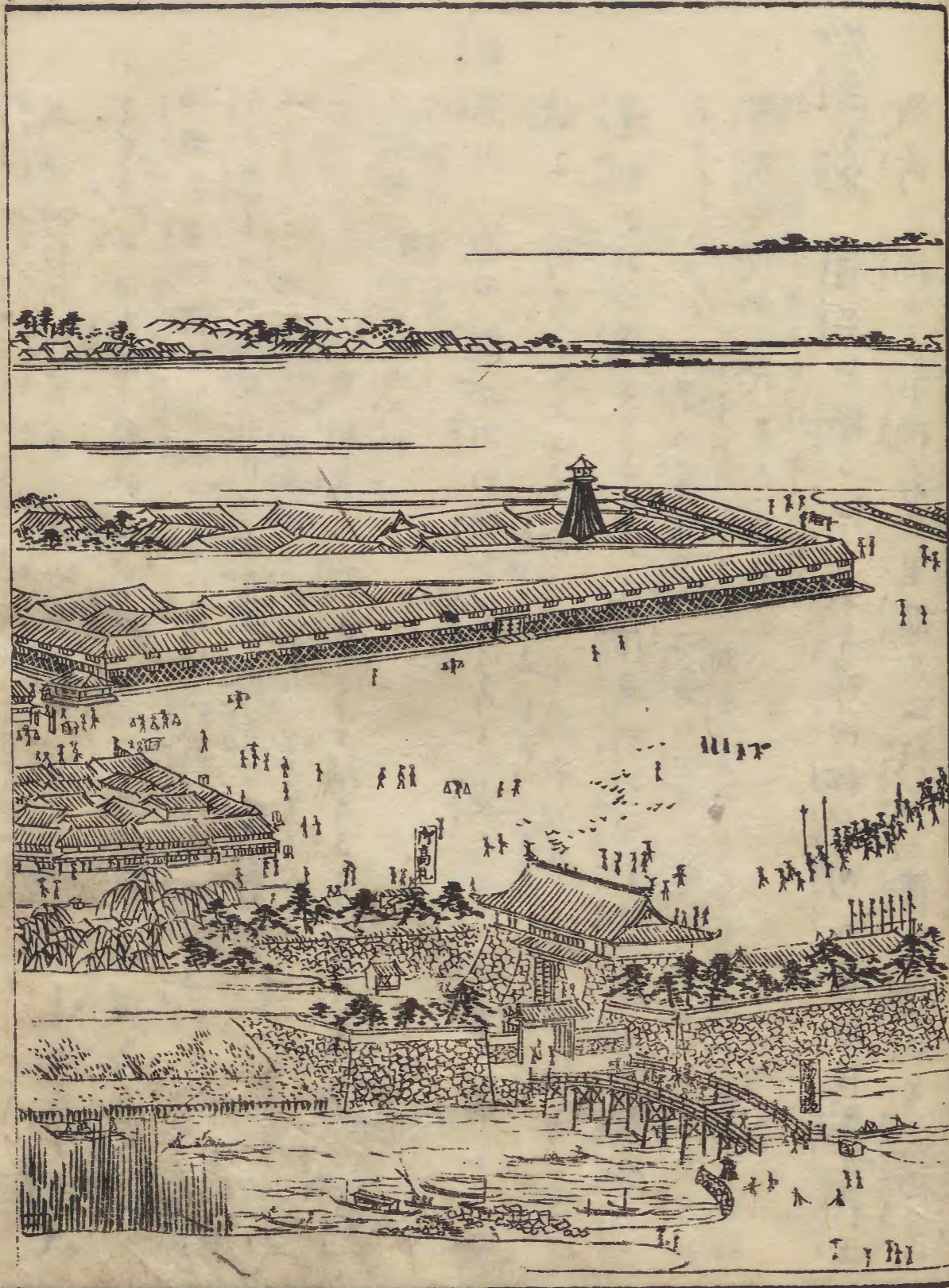
へき小似り

丹後殿前

雉子町の北の通りをの昔此地小堀丹後守殿の弟宅

あり一為小者唱へるると

寛永九年の江戸繪圖に因り考ふ今此
津田山州侯の地則堀家のやまきの跡あり



筋違
ハツ小路



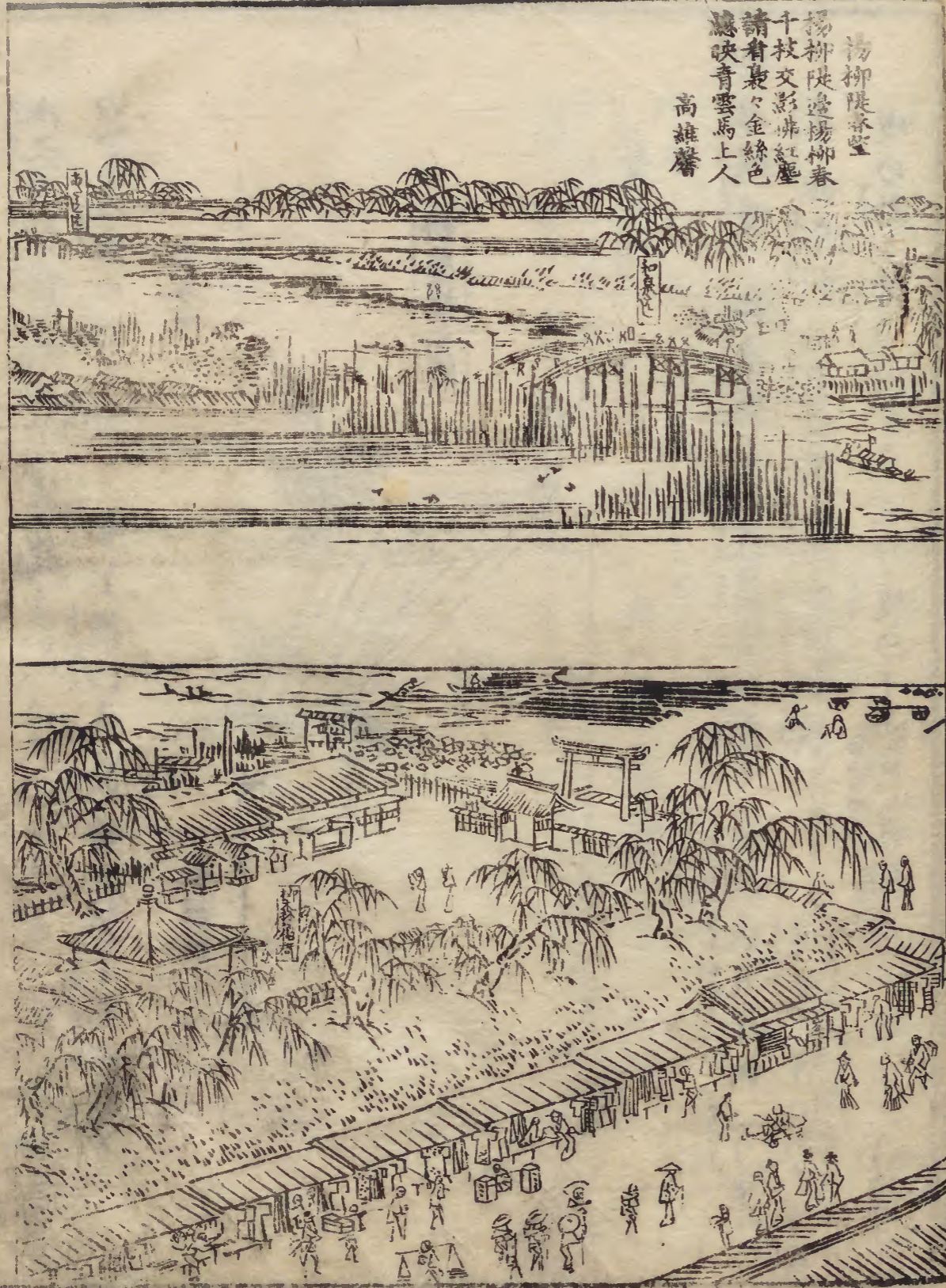
弁慶橋



少く井の形残り昔の池の余波なりとて
 池の繁昌よまろひ里老傳云昔此地ハ奥州への通
 路あり櫻樹ありはりあり池あり小櫻池とてり
 とそ其傍の櫻樹のよまろひ玉とてり女如居く往來の人よ茶を
 せむ容色たろあり心とめぬ旅人よ掛想せぬハ
 なるりきとてん中頃人よも品形も地なりとてり男二人と
 彼女よ心を通りせるとされハ切なる方よと思へとも
 まろひもあろりこれハ我身のよと思ひあつひく女ハ終よ
 此池よ身を投ぐむなりぬと形津の國の求塚の古
 りみ似くともあされあはとてり里民打寄く亡骸池此
 辺よ埋みありとてり柳を植く記念の柳とハ号ろると云く
 其舊址明曆の回録よとてり今ハ名つとてり
 存せりこの地ハ池とてり呼あつひとてり

辨慶橋 同所東の方和泉橋の通藍赤川の下流よ架す其始

楊柳隈春望
 千枝交影拂紅塵
 請看晷々金絲色
 總映青雲馬上人
 高維馨



柳原堤
 柳原堤

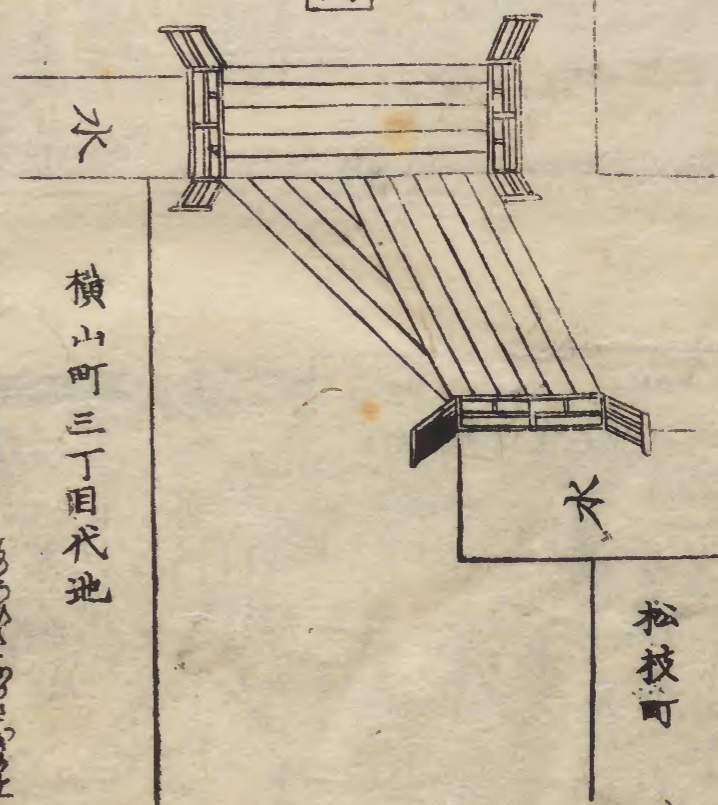


西大工棟梁辨慶小左衛門といふ人の工夫ありて懸初しと
 して此地の形に應じ衢を横切り筋替にわたり尤奇なり

岩本町

松枝町

辨慶橋之圖



元岩井町

横山町三丁目代地

柳原封壇

筋違橋より浅草橋へ續く其間長凡十町あり
 享保年間此所の堤小悉く柳を栽せり
 堤の外ハ神田川なり又此堤の下ハ柳森稻荷と稱する叢祠あり

馬場

故に此地を稻荷河岸と呼へり

昔ハ神田川の隈も此川の南北より

馬喰町三丁目の西北の裏通あり

江戸馬場の中最も古し

所なりと云傳ふ

慶長五年関原陣の時馬揃あり
 此地を馬喰町といふ此山稻荷より
 江戸馬場高木源兵衛を預りし
 此地を馬喰町といふ此山稻荷より
 江戸馬場高木源兵衛を預りし
 此地を馬喰町といふ此山稻荷より
 江戸馬場高木源兵衛を預りし



浅草橋

神田川の下流浅草橋門の入口に架せ此所を高札を建



よか
り
るれ
良木



馬喰町馬場

鶴岡放生會職人町
博労邊

多
世の

人ふもあれの

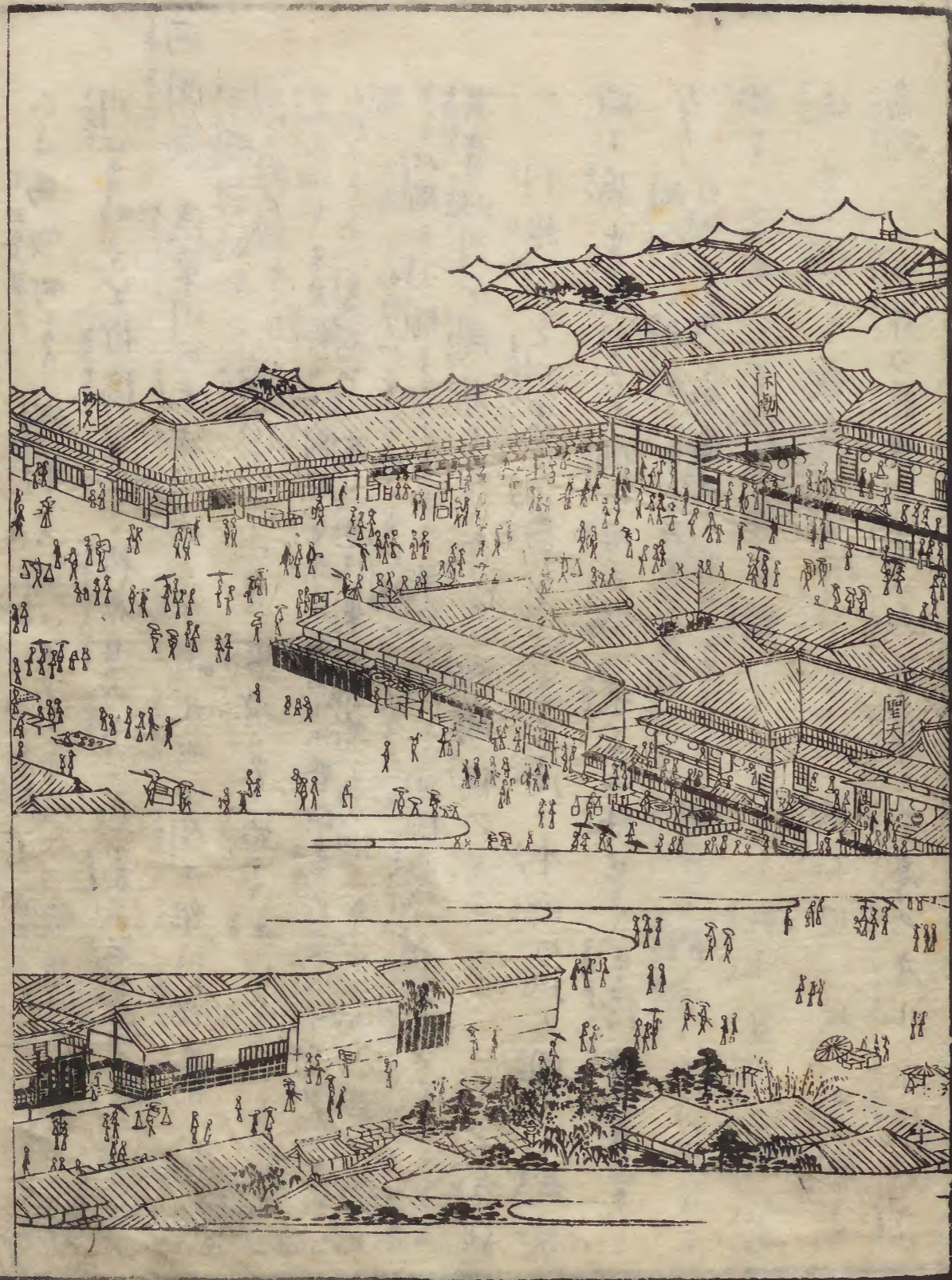
あぶら

つはさきい
こと

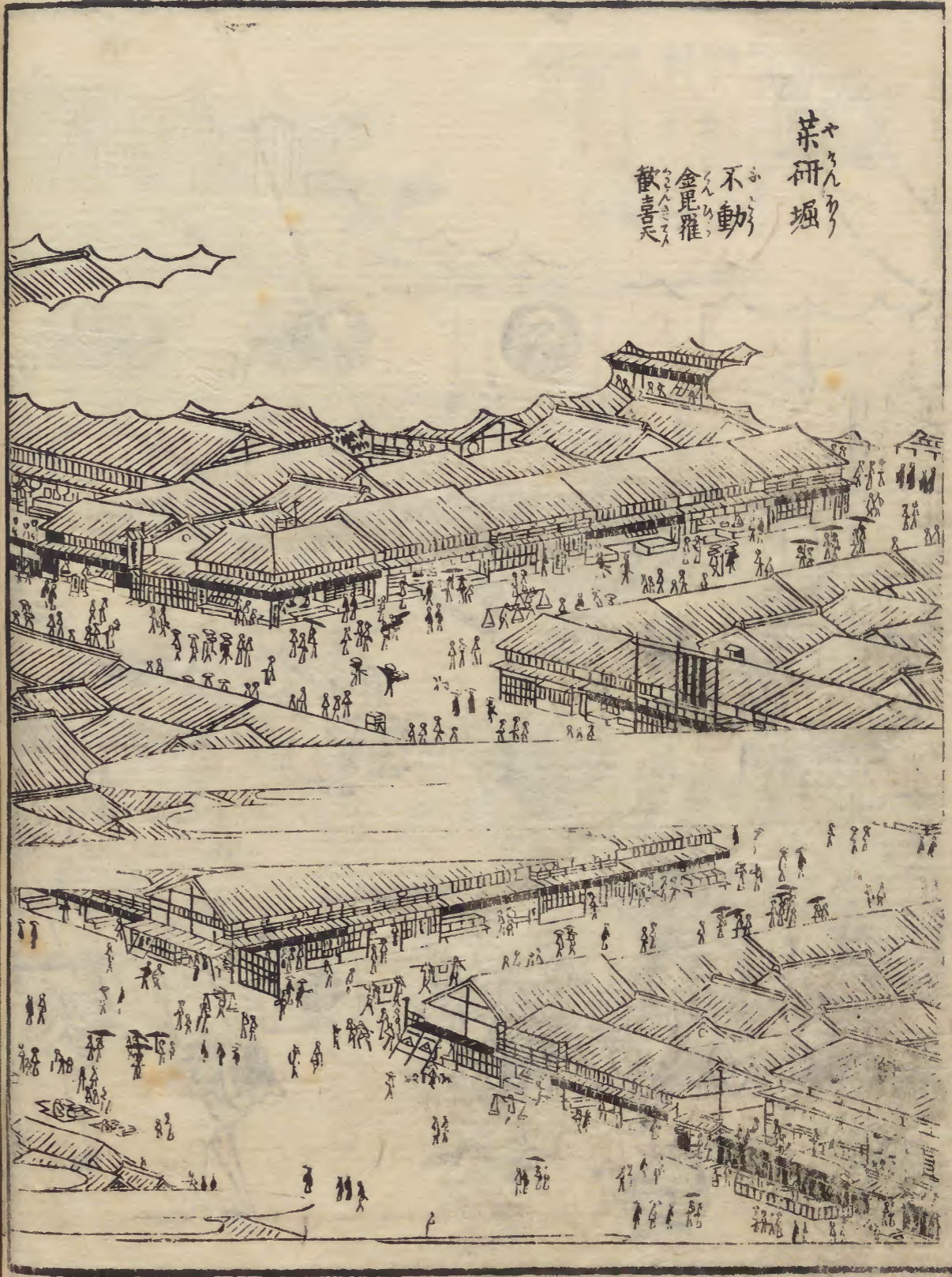
博労邊



錦繪
 江戸の名産中て
 他邦無比なる
 由中極彩色珠
 更なる美の所
 ひやありて諸國
 小賞美とす
 夥



茶研堀
不動
金毘羅
歡喜天



らる馬喰町より浅草への出口より千住への官道なり此東の大川口よりかきと柳橋と号く柳原堤の末よある所名とせり

兩國橋 浅草川の末吉川町と本所元町の間架長九十六間

寛文元年辛丑新に兩國橋を架し普請奉行芝山坪内両氏命に
此橋を大橋と号し事跡合考は万治二年東の大川筋に始り
其昔此川を國界とせしより兩國橋の号ありとす今此

利根川を以界と定めり後ハ本所の地も同じく武蔵

國に属せしとす橋の号ハ唱へ来るに任せしを改らんとす

始り八月廿八日終る常々賑はしとす就中夏月の間ハ尤

盛なり陸中を觀場とせしけり其招牌の幟ハ風飄く

扁翹より兩岸の飛樓高閣ハ大江に臨み茶亭の床几ハ水辺に立

